

Hokkaido University News

北大時報

令和7年

1

No. 850 January 2025

総長年頭挨拶

サイエンスフェスタ2024を開催

WOMAN EXPO 2024 Winterで北大ブランドを紹介



全学ニュース

- 1 総長年頭挨拶
- 3 次世代の女性教員を顕彰する「桂田芳枝賞」授与式を挙
- 4 令和6年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
- 5 サイエンスフェスタ2024を開催
- 6 新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施
- 7 令和6年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催
- 8 第19回（令和6年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催
- 9 全学インターンシップ成果発表会（国内）及び経済同友会連携インターンシップ成果発表会を開催
- 10 IT Job Fair in Hokkaido Universityを開催
- 11 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 13 令和6年度第2回部局・分野横断技術交流会「共焦点顕微鏡の観察技術向上セミナー ープロのテクニックと秘訣、おしえますー」を開催
- 14 「社会起業家になろう！アントレプレナーシップワークショップ」を沖縄で開催
- 15 「釜山9大学グローバル創業コンペティション」を開催
- 16 「第16回コラボ学長フォーラム」に産学・地域協働推進機構の土屋 努副理事及び椎名希美特任准教授が登壇
- 17 研究シーズの事業化支援プログラム「北海道BRAVE2024」のキックオフイベントを開催、経営者候補とのマッチング等を実施
- 18 カリフォルニア大学バークレー校「Berkeley SkyDeck」チームが本学を来訪
- 19 「巖鷲寮（佐藤・新渡戸記念寮）」の創立記念式典（寮祭）で、横田 篤理事・副学長が講演
- 20 クイーンズ大学副プロボストが来学、横田 篤理事・副学長とサステイナビリティに関する意見交換を実施
- 21 WOMAN EXPO 2024 Winterで北大ブランドを紹介
- 22 エコプロ2024に出席
- 23 令和6年度第2回サステイナビリティ推進員会議を開催
- 24 「きたみてガーデンSDGs農園」プロジェクトを含む北海道マラソン2024 SDGsの取組が日本陸連アスレティックス・アワード2024で「BEST THINK賞」を受賞
- 25 5大学主催Postgrad Job Fairを開催
- 26 公開シンポジウム「誰もがつながり合う共生のまちづくり～演劇教育が創る未来のビジョン～」を開催
- 27 「北海道大学 2024 DEIキャンペーン 連続講演会」を開催
- 28 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ講師が講義、見学を実施



IT Job Fair in Hokkaido Universityを開催



WOMAN EXPO 2024 Winterで北大ブランドを紹介



次世代の女性教員を顕彰する「桂田芳枝賞」授与式を挙



新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

部局ニュース

- 31 クリエイティブワークショップ「Adobe Expressを使って魅力的なコンテンツを作ろう！～誰でもかんたんにできる。もっと良くなる。その技術と知識～」を開催
- 32 経済学部で特別講演会を開催
- 33 経済学研究院地域経済経営ネットワーク研究センターがシンポジウムを開催
- 34 経済学院・経済学研究院・経済学部で令和6年度外国人留学生懇親会を開催
- 35 「社会体験ワークショップ」をオープンコースウェアで公開～北海道大学、北洋銀行ほかによる社会体験のための実践的授業～
- 36 生命科学院が「IGPシンポジウム」を開催
- 36 工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催
- 37 公開セミナー「山岳観光とアドベンチャーツーリズム」を開催
- 38 低温科学研究所技術部で第30回技術報告会を開催
- 39 人獣共通感染症国際共同研究所と創成研究機構ワクチン研究開発拠点国際シンポジウム「第12回人獣共通感染症克服のためのコンソーシアム会議」を開催
- 40 スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム「スラブ世界における言語・ネイション・標準化：その類似と相違」を開催
- 41 北方生物圏フィールド科学センター研究林からサイエンスフェスタに初出席
- 42 広域複合災害研究センターが令和6年度防災シンポジウム「北海道における広域複合災害と減災方策」を開催
- 43 「レバンガ北海道」が北海道大学病院で子どもたちと交流
- 44 北海道大学病院で「第64回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催

博士学位記授与 45

表敬訪問 47

人事 48

- 49 新任副理事紹介
- 50 新任部局長等紹介
- 51 新任教授紹介

計報

- 52 名誉教授 横山 泉 氏
- 52 名誉教授 杉山 憲一郎 氏



「きたみてガーデンSDGs農園」プロジェクトを含む北海道マラソン2024 SDGsの取組が日本陸連アスレティックス・アワード2024で「BEST THINK賞」を受賞



「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ講師が講義、見学を実施

表紙：総長年頭挨拶（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景⑧ 低温科学研究所（北19条西8丁目）

■全学ニュース

新年のご挨拶 ----大学の価値創造に向けて----

第20代総長 寶金 清博
ほうきん きよひろ



新年あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願いいたします。

本稿では、1. 「HU VISION 2030」の加速、2. 国立大学法人の価値について述べ、新たな一年に向けた私からのご挨拶とさせていただきます。

1. 「HU VISION 2030」の加速

一点目は、「HU VISION 2030」の加速についてお伝えいたします。このことについては、これまでの歴史的な振り返りが必要です。

ご存じのように、1990年代前半から2020年代前半までの約30年間、我が国では、消費者物価はほぼ変化がなく、むしろデフレーションの状況が続きました。この間、日本円の為替レートの変化や日本への投資を見ても明らかなように、日本の国際的な地位は低下したものの、国内的には、極めて安定した「風」の時代を過ごしてきました。この「風」の時期は、国立大学法人化以降の20年と重なり、「失われた30年」と言われる期間とも一致します。

2004年の国立大学法人化は、国立大学が、安定した国の財政支援による「護送船団」方式から、自律的な財務体制を構築して、教育・研究・診療を通じて社会の発展に貢献する公共体・経営体へと成長することを目指したものです。

今申し上げたように、この法人化以降の20年余り、日本の経済成長は停滞し、その結果、国立大学法人は、運営費交付金が減少する中においても、自助努力で外部資金を増加させることで、財務収支のバランスを保ち、かろうじて、大学機能を「維持」することができました。事実、北海道大学も、法人化以降、収入規模で見れば、20年で、国の経済成長を上回る成長をしてきました。

ところが、2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻により、エネルギー・食料の危機、サプライチェーンの分断が起これ、これをきっかけとして、日本の消費者物価指数も急速に上昇する中で、30年振りのインフレ状況となりました。そして、企業の設備投資も増加し、失われた30年を取り戻すべく、様々な政策誘導があり、日本では、今年は更に経済成長が加速することが見込まれます。様々な評価はあると思いますが、日本はようやく世界の成長にcatch upしつつあり、そのこと自体は、歓迎すべきことだと思います。

しかし、国立大学法人などのように、国からの運営費交付金を基盤的收入としている法人にとっては、直近の物価上昇や民間企業を中心とする経済成長は、新たな難題をもたらしました。ただでさえ低下している運営費交付金の実質的価値がさらに低下し、社会全体が成長する中で、公共体としての国立大学の価値が大きく埋没することを意味しています。

これに対して、一昨年、私たちは、2030年に向けた大学ビジョン「HU VISION 2030」を公表しました。このVISIONは、八つの視点から、「持続可能なWell-being社会」の実現に向けた北海道大学が目指す大学像を示したものです。

ただ、前述のとおり、経済成長のシナリオが想定より早く現実のものとなった以上、財務基盤とガバナンスの強化に関しては、その取組を大きく加速する必要があります。これは、組織全体に大きな負荷がかかるものですが、これを成功させることができるかどうかは、北海道大学に限らず、全ての国立大学法人の真価が問われるものです。北海道大学は、この一年、教職員一丸となって、「HU VISION 2030」の実現に向けた取組を加速させます。

2. 国立大学法人の価値

二点目ですが、国立大学法人及び北海道大学の「価値」について、皆さんと考えたいと思います。

国立大学法人は、その価値を活用するために、法人化によって財務的な自主裁量権・フリーハンドを与えられました。この権限を最大限に活用すべきであり、本学においても、土地の活用やクラウドファンディング、寄附や基金の増大とその積極的運用、あるいは、大学債の発行など、法人化によって与えられた権限を最大限に活用しています。

また、一方で国立大学法人は、私企業ではなく、この国の未来を担う高度人材の育成と基盤的研究をミッションとする公共体であり、国民共有の財産です。運営費交付金の原資は、言うまでもなく、国民の税負担であり、言い換えれば、我々、国立大学法人に付託された日本国民の意思そのものです。

しかし、法人化による各種規制緩和の活用にしても、あるいは、運営費交付金の適正な規模を求めるにしても、その根拠となるのは、大学の「価値」です。言い換えれば、

国や国民、そして、社会や企業が、北海道大学の価値をどれだけ評価してくれるかにかかっています。

当然のことながら、国立大学法人の「価値」の源泉は、教育と研究にあります。この価値に問題があるとすれば、その原因として、二つの可能性があります。一つは、すでに、私たちが社会に貢献できる教育や研究を保有しているにも関わらず、それを社会・国民に伝えきれていない可能性です。いわば、説明責任、Accountabilityの問題です。これは、「HU VISION 2030」の言葉で言い換えれば、Extension機能をさらに強化することであり、今後、社会共創部門をさらに強化することで克服できるはずです。

もう一つは、私たちの教育・研究が、社会や国民の求めるものと一致していない可能性です。これは、可能性ではなく、事実、そういうところもあるのだろーうと思っています。これを、「HU VISION 2030」の座標軸で言えば、Excellenceの内容に関わることです。

この一年、私たちは、例えば、教育では、社会が求める博士人材の育成に向けて大学院教育の大きな改革を進める必要がありますし、研究では、エネルギー・経済・食料安全保障の観点から、J-PEAKS研究や再生可能エネルギー研究、半導体研究などを強化する必要があると思います。

教育・研究の価値は、短期的な視点や実用性の視点だけから評価される訳ではなく、長期的な視点や学術的な価値

の視点も重要です。しかし、いずれにしても、大学の中だけや、研究者個人の中で完結してはいけないことは間違いなく、どのような教育にしても、あるいは基盤的な研究にしても、社会との関係性なしには評価されることはないと思います。

来年2026年は、北海道大学創基150周年の記念すべきマイルストーンを迎えます。言い換えれば、本年は、社会に対して、私たちが、説明責任、Accountabilityを果たす、絶好の機会でもあります。

この一年は、本学が持っているExcellenceを改めて磨き、そして、2026年の150周年の時期に向けて、説明責任を最大限に果たしつつ、Extensionをさらに拡張する一年にしたいと思っています。

教職員の皆様には、これまでと同様に、それぞれの立場や責任を果たしていただきたいと思います。そして、それ以上に、今年は、「HU VISION 2030」の実現に向けて、それぞれの立場や職種を超えて、一丸となって、国立大学法人・北海道大学の社会的価値を高めていただきたいと思います。

最後になりましたが、本年一年、皆様方のご活躍、ご健康を祈念して、年頭の挨拶とさせていただきます。



次世代の女性教員を顕彰する「桂田芳枝賞」授与式を挙行

12月4日（水）、事務局において「国立大学法人北海道大学桂田芳枝賞」授与式を挙行しました。

本賞は、本学において学術上優れた研究を展開するとともに、次世代の管理職等として活躍することが期待される本学所属の女性教員を顕彰することで、当該女性教員自身及びこれに続く多くの女性教員の励みとし、上位職並びに管理職への女性登用の促進に繋げ

ることを目的としたものであり、令和5年3月に新たに創設され今年度が第2回目の授与式となります。

授与式では、関係者列席のもと、寶金清博総長から笠井久会教授（水産科学研究院）、池田敦子教授（保健科学研究院）、玉腰暁子教授（医学研究院）、長里千香子教授（北方生物圏フィールド科学センター）の4名に、顕彰状及び報奨金（目録）が授与されました。

また、授与式後には寶金総長を囲んで懇談会が開催され、本学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部の本部長である山口淳二理事・副学長及び副本部長である矢野理香副理事が参加し、女性研究者の更なる活躍に向けた方策などについて活発な意見交換が行われました。

（総務企画部人事課厚生労務室）



記念撮影（左から山口理事・副学長、玉腰教授、笠井教授、寶金総長、池田教授、長里教授、矢野副理事）

令和6年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催

12月5日（木）・6日（金）の2日間、情報教育館にて、令和6年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催しました。

本研修は、「大学職員のキャリア形成と意識改革」をテーマとして、①職場である大学を、日常業務から少し離れた視点で捉え、②現場で起きている様々な問題の背景、改革の方向などについて考え、③他の参加者や講師と議論しながら今後の課題を探っていくことを目的として、大学院教育推進機構高等教育研修センター（以下、高等教育研修センター）、総務企画部人事課及び学務部学務企画課が主催し、教育学研究院の協力により実施しているもので、今年度から北海道FD・SD協議会幹事会SDプログラム開発ワーキンググループも企画・運営協力に加わりました。

大学職員セミナーは、大学職員が、教員とともに大学改革の重要な担い手として、その専門性を高める学習・研修の場として、平成18年度から実施しており、今回が16回目の開催となります。

ます。

今回は、「未来志向でキャリアを描く」をテーマとして実施し、本学職員1名を含む、道内の国公立大学、高等専門学校職員の33名が参加しました。

1日目は、高等教育研修センター副センター長の山本堅一准教授による開講の挨拶の後、札幌市立大学の最上美緒氏を講師として「大学職員としてのあなたの“強み”とは」のワークを行い、その後、「大学職員の生き様－過去・現在・未来－」をテーマに、本学附属図書館事務部利用支援課の横井有紀課長、北海道科学大学入試・地域連携部入試課の宮武真知課長、室蘭工業大学経営企画課の田嶋 学係長、札幌市立大学地域連携課の五十嵐茉莉子氏による発表・パネルディスカッションを行いました。研修終了後の情報交換会では、講師を交えて活発な意見交換と参加者同士の交流が行われました。

2日目は、「これからの時代を大学職員としてどう生きるか」をテーマとして、講演とワークを行いました。午前中は、経済産業省イノベーション・

環境局イノベーション政策課大学連携推進室の川上悟史室長による「2050年の仕事と大学」をテーマとした講演の後、「バックカasting思考を身につける」をテーマとしてワークを行い、午後から、未来を想定した事例について、ケーススタディによるグループワークを行いました。全日程終了後に、山本副センター長から修了証書が授与されました。

アンケートでは、「5年後、10年後どうなっていきたいかを意識しながら仕事をしていきたい」「他大学の先輩と話す機会があり、直属の先輩には抵抗があるようなことも相談することができてよかった」「様々な立場の職員の話聞くことで、自分の理想のロールモデルを考えることができた」「大学の中にいるだけでは、時代の流れに置いていかれてしまうという焦りも感じたため、自分から学外に出て、積極的に新しいことをインプットしていきたい」といった感想が寄せられました。

（学務部学務企画課）



パネルディスカッションの様子



川上室長による講演



グループワークの様子



修了式後の集合写真

サイエンスフェスタ2024を開催

12月14日（土）、15日（日）の2日間、札幌駅前通地下広場にて「サイエンスフェスタ2024」を開催しました。令和4年から開始した本イベントは、本学の学生の活動や研究成果が社会に還元される姿を一般市民の方々に知っていただくとともに、次世代を担う小学生、中学生及び高校生に、サイエンス（科学技術）に興味を持ってもらい、サイエンスを通じて、新たな学びや気づきを生む機会を提供することを

目的とするものです。

今年は「共創」をテーマとして、各種企画を実施しました。14日（土）には北海道テレビ放送株式会社の協力により、onちゃんテラス1Fを会場として、気象予報士の清水秀一氏と大学院生3名による、天気と自身の研究内容を絡めたトークセッションが開催されました。また、初参加となる北海道大学病院は札幌市保健福祉局ウェルネス推進部ウェルネス推進課と共にさっぽ

ろウェルネスフェアを行うなど、自治体、企業、高校らと連携することで、例年以上の盛り上がりを見せました。

博士後期課程学生による研究成果のポスター発表については、今回ご来場いただいた方々からの投票に加え、今後、学内外の審査員によって、各賞の受賞者を決定し表彰式を行う予定です。

（学務部学務企画課大学院教育改革推進室）



ポスター発表ブース



ブロックで未来のまちを創るワークショップ



onちゃんテラス会場



北大病院によるさっぽろウェルネスフェア

新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

12月7日（土）、高等教育推進機構において、「新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会」を開催しました。このシンポジウムは、「新渡戸カレッジ」独自の授業科目である「新渡戸学（フェローゼミ）」の成果報告を行うものです。当日は、新渡戸カレッジ校長代理の山本文彦理事・副学長からの挨拶の後、社会課題の解決を目指す6ゼミの代表グループと、学生企画として1グループの合計7グループが、持続可能な社会の実現を目指した提言や成果報告を行いました。

今年度のシンポジウムでは、新渡戸カレッジ生が情熱溢れる6名のフェローと、本学支援教員、チューター（新

渡戸カレッジ所属の上級生）のサポートを受けながら、ユニークで分かりやすい成果報告に努めた発表が多く見られました。続くフェローゼミ履修済みの上級生で構成されている学生企画の発表からは、獣医学研究院の坪田敏男教授による特別講義や、旭川市内の各施設・団体（川村カトアイン記念館、NPO法人「もりねっと北海道」、旭山動物園、旭川市役所）のご協力により視座を高め、学びを深めた様子がうかがえました。

それぞれの発表毎に新渡戸カレッジ生の活発な質疑応答が交わされ、出席者が会場とオンライン上で見守る中、盛会のうちに終えることができました。

イベントの最後に新渡戸カレッジ副校長の舩 和順副学長より発表されたフェローゼミ学生大賞受賞グループは、野菜摂取に関するテーマで令和7年度の新渡戸カレッジ入校式の際、新入校生を前に再び発表する予定です。

最後に、フェローゼミ及び学生企画の発表をご指導いただいた各フェロー及び支援教員、新渡戸カレッジへのご寄附を賜りました皆様、その他ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

（学務部教育推進課）



フェローゼミ発表の様子



学生企画発表の様子



学生大賞を受賞した大友ゼミのメンバーと
山本理事・副学長（右から4人目）と舩副学長（左）

令和6年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催

外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラムである現代日本学プログラム課程（以下、現プロ）の4年生による卒業論文ポスター発表会が、12月13日（金）に遠友学舎にて開催されました。

発表会では、今年度末に現プロ第7期卒業生となることを目指す4年生18人が、卒業論文の内容をポスター報告の形式で発表しました。発表された卒

業論文は、英語または日本語で執筆され、日本の地域政策、経済政策、言語学やアートなどの様々なテーマについて、外国人留学生ならではの視点から研究を行った成果をまとめたもので、4年間学んできたことの集大成と言えるものです。

発表会には、同課程担当教職員や現プロ学生など多数の参加者が出席しました。各報告者からの興味深い発表に

対して多くの質問が飛び交い、和やかで活気のある発表会となりました。

3月25日（火）開催予定の現プロ学位記授与式では、卒業論文が特に優秀と認められ、かつ、今回の卒業論文ポスター発表会において優れた発表を行った学生に対し、現プロ最優秀卒業論文賞の授与が予定されています。

（学務部教育推進課）



卒業論文ポスター発表者



発表の様子

第19回（令和6年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院カリキュラムでは、12月14日（土）に高等教育推進機構において、第19回メンターフォーラムを開催しました。

社会の多様な分野で活躍する方々がメンターに就任し、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具

体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部では「Job-hunting tips for degree holders : Valued skills and experience」のテーマで講演会とパネルディスカッションを行い、5名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でお話いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンターへ自由に質問し対話を行

う交流会として実施しました。新渡戸カレッジ生は、大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ることができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な知見を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）



石川憲一メンターによる講演の様子



パネルディスカッションの様子

全学インターンシップ成果発表会（国内）及び経済同友会連携 インターンシップ成果発表会を開催

キャリアセンターでは、10月23日（水）及び11月14日（木）に、令和6年度に実施した全学インターンシップの成果発表会を開催しました。

全学インターンシップはインターンシップ先の企業・団体等の開拓や調整、学生の選考、インターンシップ参加前や参加後の学生への研修に大学が関与する、正課の教育科目としてのインターンシップ制度です。夏季休業中に原則5日間程度以上のインターンシップを推進しており、就業体験における教育効果を高めています。

今年度は、学部1・2年生と修士1年生限定で経済同友会と連携した特別インターンシップ参加者13名を含む、88名の学生が全学インターンシップに参加しました。

10月23日（水）は、全参加学生を対象とした成果発表会をオンラインで実施しました。グループに分かれて、自分のインターンシップでの経験や学んだことについて討論を行った後、意見を取りまとめ発表しました。この成果発表会には学生を受け入れた企業・団体等の関係者にも参加していただき、それぞれのグループでの話し合いや全体の発表の様子を見学の後、受け入れをした感想や学生へのメッセージなどをフィードバックしていただきました。

11月14日（木）は、経済同友会と連携したインターンシップ参加学生による成果発表会をハイブリッド形式で実施しました。本インターンシップは学部1・2年生に限定して実施していましたが、今年度より修士1年生限定の「M1エンカレコース」が新設され、学部1・2年生9名、M1エンカレコース4名の計13名の学生が、1～2週間程度の就業体験に参加しました。

参加学生は、受入プログラム内容やインターンシップ参加前に設定した仮

説と検証結果、学んだことを今後の学生生活でどのように活かしていくか等について、それぞれスライドを用いてプレゼンテーションを行いました。受入企業や経済同友会関係者、学内関係者、次年度のインターンシップに参加を検討する学生など多くの見学者が対面・オンラインから参加し、会場とオンラインをスムーズに繋いで、活発な質疑応答や対話が行われました。

（キャリアセンター）



開催挨拶を行う高橋 彩理事・副学長



経済同友会インターンシップについて説明を行う
高等教育推進機構の亀野 淳教授



プレゼンテーション形式での発表と質疑応答を行う学生



発表会会場のインターンシップ参加学生集合写真

全学インターンシップ成果発表会

日 時：2024年10月23日（水）18:30～20:30

会 場：オンライン（Zoom）

参加対象：全学インターンシップに参加した学生 受入企業・団体等

経済同友会連携インターンシップ成果発表会

日 時：2024年11月14日（木）16:40～19:45

会 場：高等教育推進機構E棟 3階 E308講義室（対面）・オンライン配信（Zoom）

参加対象：経済同友会連携インターンシップに参加した学生、受入企業・団体、関係団体等

ハイブリッド形式開催協力：大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター

IT Job Fair in Hokkaido Universityを開催

12月18日（水）、クラーク会館で留学生のためのIT合同企業説明会「IT Job Fair in Hokkaido University」を開催しました。

今年で3回目の開催となり、道市連携海外展開推進事業（国際ビジネス人材支援事業）としては2年連続の取り組みとなります。

当日は雪が降る中、16か国、57名の留学生在が会場に訪れ、道内IT企業16社

のほか行政ブースで熱心に話を聞いていました。

学生の参加理由は「どんな企業があるか知りたい」「暮らしてみても、便利なので札幌で働きたいと思った」が大半で、中には7社以上を回った学生もいました。

また、企業側からは「様々なスキルを持った人材と会話ができた」「採用したいと思う学生がいた」「初めて参

加したが勉強になった」「こんなに多数の学生が参加してくれるとは思わなかったのが驚いている」などのお声をいただきました。

キャリアセンターでは、学内で企業と学生が出会える貴重な機会を、今後も増やしていきたいと考えています。

（キャリアセンター）



最も学生の参加が多かったブース



企業の話聞く留学生



札幌新卒応援ハローワーク（行政）ブース




令和6年度 道市連携海外展開推進事業
(国際ビジネス人材支援事業)

FREE EVENT

Work in
Sapporo, Hokkaido!

IT Job Fair

in *Hokkaido University*

DATE
2024 **12/18** WED
1 PM - 4 PM

INFORMATION

ELIGIBLE PERSON 参加対象者

- International people who would like to work in Sapporo, Hokkaido.
- 2025 & 2026 graduates and former graduates are encouraged to apply!

Get! ¥1,000 GIFT Get! [with conditions]

条件付きで最大1,000円ギフトをゲット!

VENUE 会場

北海道大学
クラーク会館
大集会室1・2

札幌市北区北8条西6丁目



SCHEDULE 当日のスケジュール

12:45 Open 受付開始

13:00 Start of the Job fair Job Fair開始
Get ¥500 gift with pre-registration!
当日参加で¥500ギフトをゲット!

Get another ¥500 to visit & talk to more than 5 company booths!
(1人1回につき¥500) 5社以上企業との説明を聞いた人、さらに¥500ギフトをゲット!

16:00 Closing [16:00-16:30 Free Time]

PARTICIPATING COMPANIES 参加企業 About 15 companies

- 株式会社アクセント / Accenture
- 株式会社インフル / impl
- FPT ニアショアジャパン株式会社 / FPT Nearshore Japan
- ダイヤモンドヘッド株式会社 / Diamondhead Co., Ltd.
- 株式会社ミックウェア / MICWARE CO., LTD. And more...

● All explanations will be given in Japanese. このイベントはすべて日本語で行います。

● Language support is available in English, Chinese, and more.

英語や中国語などの言語サポートがあります。

Walk-ins are Welcome! 当日の参加もOK!

Apply by 申込締切 **2024 12/17 TUE**

Contact Natsui / Tomosugi / Hisamura

TEL 011-251-5803

E-MAIL cb-international@career-bank.co.jp

URL <https://sapporo-intl.net/post486/>



イベントのポスター

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をするとしています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	（11月30日現在）／51,464件	7,668,412,709円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	（11月30日現在）／14,416件	1,503,644,152円

<ご寄附状況>

11月は364件184,396,323円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。
（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社アイワード、アフラック道央アソシエイツ会、株式会社WhiskyStudent、株式会社ウォーターテック、医療法人社団恵庭南病院、荏原実業株式会社、医療法人社団功仁会足立皮膚科美容外科クリニック、医療法人社団功仁会釧路皮膚科クリニック、弁理士法人佐川国際特許商標事務所、ジャパンレンタル株式会社、株式会社シン技術コンサル、水ingエンジニアリング株式会社、公益財団法人杉野目記念会、医療法人スワンアイクリニック、ダイキン工業株式会社、医療法人社団武田集会ただけ皮膚科スキンケアクリニック、株式会社データ設計、日特建設株式会社、日本接点工業株式会社、日本甜菜製糖株式会社、医療法人社団ふるや内科、ベル食品株式会社、北海道ガス株式会社、公益財団法人北海道結核予防会、北海道大学体育会ヨット部、株式会社北海道中央不動産鑑定所

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	赤平 幸郎	浅田 敏文	浅沼 佳南	阿部 俊夫	阿部 雅史
在田 一則	池上 八郎	石井紀恵子	石井 武雄	石井 哲夫	石垣 隆弘	伊田 尚史	井出 肇
伊藤 悠温	伊藤 雄三	井戸川寛志	井上 哲二	井上 将希	猪股 路子	井原 博	今井 晋
入澤 秀次	岩城 敏雄	上杉 敏	上田 雅敏	上野 勝利	梅本 由佳	縁記 和也	遠藤 公憲
大久保麻子	太田 京子	大出 孝博	大藤 泰雄	大橋 武一	大原 正範	岡田 英子	岡村 康司
岡本 博之	沖崎 遼	小澤 宗之	小田原一史	小野寺弘道	小原 大和	親松 茂	加賀 泉
加地 浩	加藤 元	加藤 誠哉	加藤 伸康	角 幸博	金川 眞行	金田 聡門	神山 誉
川上 広太	河野 純	河本 充司	衣川 暢子	木村 彰人	久崎 恵理	工藤 正身	工藤 葉子
倉持 允昭	栗田 健	栗原 誠治	紅林 幸子	上月 浩	後藤 泰	小林 賢人	小林 淳
小林 伸一	小林 隆徳	小堀 武	小松 知己	小松 伸彦	小松 寿幸	齊藤 晋	齋藤 久
佐伯 昇	坂井恵美子	坂本 大介	崎元 大志	佐藤 弘次	三升畑元基	三千 敏弘	志済 聡子
嶋田 礼子	清水喜三男	菅原 新也	杉井 敬	杉江 和男	鈴木 貴之	瀬戸 務	瀬名波栄潤
高瀬登志彦	高田 寛之	鷹野 正義	高橋 恒久	高橋 正通	高柳 涼	滝沢 亮介	田栗 和奈
武田 善行	田代 邦雄	田代理枝子	忠永 清治	田辺 暢浩	谷口 哲司	田 恵太	土家 琢磨
出口 廣志	寺澤 睦	徳田 直樹	豊崎 一彦	豊田 威信	中井 光野	中井 龍三	中島 和彦
中野 平	中村 俊二	中村 輔	名倉 泰三	那須 仁夫	那須 信江	七澤 淳	鳴海 勇蔵
西田 和代	沼田 桜子	根本 叔治	羽賀 直哉	箱石 文祥	長谷川壽保	長谷 由理	花田 秀一
馬場 直志	林 雄一	原 啓介	廣重 勝彦	廣島 和夫	広島 基	深田 直之	福井 滋

福井 睦子	福永 悟郎	藤崎 和夫	藤澤 裕子	藤田 芳康	古川夕里香	古田 暁宏	古谷健太郎
古谷 周三	北條 敬之	細川 嘉一	本間 昭一	本間 義信	本美 幸三	増山 邦彦	増田 理乃
真勢 徹	松井 耕二	松井 寿子	松岡 健一	松中 照夫	松原 謙一	三木 證永	南田 大朗
宮田 信幸	宮本 衛市	宮本 宏	三代川典史	村上 広輝	村木 達男	村瀬 猛	村瀬徳啓充
村瀬 亮太	毛利 哲夫	本山 哲	森山 圭悦	安川真一郎	山崎 亨史	山田 和奈	山田 清司
山田 敏彦	山田 知充	山田 夏希	山田 安秀	湯川 康史	横山 考	吉田 広志	吉村 昌浩
吉本 諭	吉年 慶一	若狭 哲	和田 武夫	渡辺 崇彦	渡辺美代子		

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

<感謝状の贈呈>



上田昭平様（令和6年11月12日）



吉田広志様（令和6年11月12日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室 基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

（<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

令和6年度第2回部局・分野横断技術交流会「共焦点顕微鏡の観察技術向上セミナー ―プロのテクニックと秘訣、おしえます」を開催

11月14日（木）に電子科学研究所ニコンイメージングセンターにおいて令和6年度第2回部局・分野横断技術交流会「共焦点顕微鏡の観察技術向上セミナー ―プロのテクニックと秘訣、おしえます」を開催しました。

本技術交流会は技術職員が自ら企画、運営を行い、各自の持つスキルの継承・伝達・強化を図り、また異分野の技術職員と技術を通して交流することで、技術職員同士の全学的な人材交流・技術情報交流・技術強化を図ることを目的とした、北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチ人材育成プロジェクトの事業として行われました。

午前は講師を招へいしてセミナーを行い、午後からは実際に顕微鏡を用いた実習形式で実施しました。なお、特別企画として、受講者以外の技術職員、教職員、研究者もオブザーバーとしての参加を許可しました。

今回は生体組織等の微細構造を観察

する装置として広く普及している共焦点顕微鏡の原理から、適切な顕微鏡画像の取得方法の習得を目的としました。研究者等に操作方法等を説明する技術職員が、優れた顕微鏡画像を取得するノウハウ等を習得して業務支援に反映させることにより、大学全体の技術力向上が期待されます。

午前は、自然科学研究機構生理学研究所及び同機構生命創成探究センターの堤元佐特任助教に講義を行っていただき、生物組織などを観察する光学顕微鏡の概略や原理、そして実際に観察する際に注意すべき点といったノウハウをご説明いただきました。今回の講義では、十分な時間を設けて、基礎的な内容から顕微鏡での実際の観察方法のコツなども説明してもらい、参加者の理解につなげることができました。

午後の実習では、実際に顕微鏡の観察実習を行いました。生きている細胞を準備し、この内部構造を観察して細胞内構造の3次元モデル構築、あるいは

は毎秒10枚以上の画像を取得する超高速観察を行いました。こうした観察は、装置担当者が実際に対応する可能性があり、そして難易度の高いテーマとなります。今回は参加者が自ら装置やソフトウェアを動かすことにより、生きている細胞を顕微鏡で直接観察できることを実感する格好の機会となりました。

上記のような講義と実習の開催により、本学の技術職員が実務的な顕微鏡の観察技術の習得が達成できたとともに、参加した技術職員同士の交流の機会ともなりました。今後の卓越した技術支援に活用できることが期待されます。

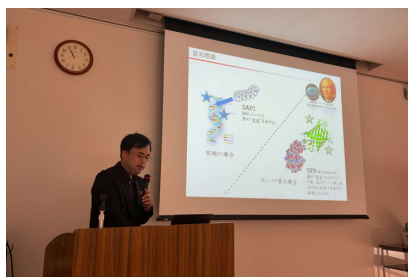
なお本企画は、文部科学省「先端研究基盤共用促進事業（コアファシリティ構築支援プログラム）」（令和2年度～6年度）の一環として開催されました。

（技術支援本部）

主 催：CoSMOS（技術支援本部及び創成研究機構GFCの協働組織）

共 催：北海道大学電子科学研究所ニコンイメージングセンター

コーディネーター：電子科学研究所 小林健太郎、中野和佳子



堤特任助教による講義の様子



講義の様子



顕微鏡を用いた実習の様子

「社会起業家になろう！アントレプレナーシップワークショップ」を沖縄で開催

産学・地域協働推進機構は、11月2日（土）、3日（日）に、琉球大学の琉ラボ及びインキュベーション施設のLagoon KOZAと連携し、社会課題に対してビジネスの手法を通じて解決策を考えるワークショップを沖縄にて実施しました。本学から参加した学生5名を含め、全国から学生が30名参加し、2日間を通じてグローバルな視点と地域性を掛け合わせた事業構想を練り上げました。

ワークショップの前半は起業家による基調講演やメンターによるセッションを通じて、ビジネスアイデアの発想

法や課題解決のアプローチについて学び、後半は少人数のチームに分かれ、アイデアを具体化するプロセスを進めました。本学の学生がリーダーを務めたチームからは、「鹿のロードキル問題」や「地方の高齢化問題」など、北海道ならではのテーマを扱った提案が発表されました。コメンテーターから「地域の課題に密着した新規性のあるアイデアが多く見られた」と高い評価を受けるとともに、今後のブラッシュアップに向けた具体的なアドバイスが提供されました。

参加者からは、「普段は異なる環境

で学んでいる学生と協働でき、刺激を受けた」「自分のアイデアを深掘りするプロセスで多くの学びがあった」といった声が寄せられ、学びと実践を両立させたワークショップの価値が発揮されました。

今後も、学生が地域や社会と連携しながら成長できる場を提供し、次世代を担う人材の育成に取り組んでまいります。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

日 時：11月2日（土）10:00～18:00

11月3日（日）10:00～16:30

参加者：高校生・大学生・大学院生30名

会 場：Lagoon KOZA（沖縄県）



ワークショップの様子



協力してワークショップに取り組む学生たち



各学生チームのリーダー



集合写真

「釜山9大学グローバル創業コンペティション」を開催

11月14日（木）～16日（土）に、産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、釜山創業共有大学協議会と共催で「釜山9大学グローバル創業コンペティション」を札幌市内にて開催しました。本イベントは、スタートアップに関する知識やスキルを向上させるとともに、グローバルな視点を養うことを目的とし、日韓両国の学生が協力して取り組むアントレプレナーシップ教育の一環として実施しました。

韓国の9大学から学生63名、教職員17名が札幌市を訪れ、本学の学生をはじめとする北海道の大学生13名とともに日韓混成チームを結成し、札幌市の地

域特性や市場ニーズに基づいたデータ収集等のマーケティングリサーチを行いました。Deep Tech CORE SAPPOROでの最終発表会では、本機構の椎名希美特任准教授の講演に加え、各チームが調査結果を基に具体的なビジネスプランをプレゼンテーションしました。発表では、地域資源を活用した観光ビジネスや、日本市場に向けた製品・サービスの展開案など、多岐にわたるアイデアが披露され、実践的な学びが共有されました。

参加した本学の学生からは、「異文化の学生と一緒にプロジェクトに取り組む中で新たな視点を得られた」「ディ

スカッションを通じて自分のスキルを試す良い機会だった」との感想が寄せられました。また、韓国の学生からも「日本の市場について深く学べた」「チームで協力して課題に取り組む過程が非常に楽しかった」といった声が上がりました。

今後も国際的な視野を持つ企業家人材の育成を目指し、このような交流型プログラムを積極的に実施していく予定です。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

日 程：11月14日（木）～11月16日（土）

場 所：札幌市内、Deep Tech CORE SAPPORO（最終発表会場）

参加者：北海道の大学生13名、韓国の大学生63名・教職員17名



講演の様子



発表チーム



最終発表会の審査の様子



集合写真

「第16回コラボ学長フォーラム」に産学・地域協働推進機構の土屋 努副理事及び椎名希美特任准教授が登壇

11月22日（金）にオンラインにて開催された「第16回コラボ学長フォーラム」に、産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部長を務める土屋 努副理事及び椎名希美特任准教授が登壇しました。

本フォーラムは、全国の大学長、学長経験者、産業界・金融機関・行政機関の関係者等が一堂に会し、大学を取り巻く環境変化や課題を共有し、産学官金連携による地域社会への貢献や人材育成について議論することを目的としており、文部科学省、経済産業省及び金融庁の後援を受けて一般社団法人コラボ産学官が主催しました。

第16回目の開催となった今回は、「人

材育成における産学官連携の役割の進化」をテーマに開催され、本学からは文部科学大臣が任命するアントレプレナーシップ推進大使を務める土屋副理事及び椎名特任准教授が特別講演とパネルディスカッションに登壇しました。

椎名特任准教授による特別講演では、「100年先を見据えた産学官連携による人材育成—アントレプレナーシップを育むエコシステム形成を目指して—」というテーマのもと、アントレプレナーシップ教育の必要性を語るとともに、企業の抱える課題を解決するためのビジネスアイデアを考えるためのビジネスアイデアを考えるDEMOLAプログラム等、本学が企業と連携して行っているアントレプレナ

ーシップ教育の事例を紹介しました。その後のパネルディスカッションでは、土屋副理事、椎名特任准教授の両名が登壇し、室蘭工業大学の松田瑞史学長、秋田県立大学の福田裕穂学長、長岡技術科学大学の鎌土重晴学長、電気通信大学の田野俊一学長、信州大学の中村宗一郎学長と、特別講演に端を発した未来の人材育成について活発に意見交換を行いました。

今後もこのような機会を活用し、アントレプレナーシップ教育の展開に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

日時：11月22日（金）14:00～17:00（Zoomによるオンライン開催）

主催：一般社団法人コラボ産学官

後援：文部科学省、経済産業省、金融庁

公式サイト：<https://www.collabosgk.com/>

研究シーズの事業化支援プログラム「北海道BRAVE2024」のキックオフイベントを開催、経営者候補とのマッチング等を実施

12月2日（月）、フード&メディカルイノベーション国際拠点にて「北海道BRAVE2024」のキックオフイベントを開催しました。本プログラムは、大学等で培われた研究成果を事業化につなげるための支援プログラムで、本学が主幹機関を務める北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（以下、HSFC）と札幌市が協力して進める施策です。

一般的に、大学等のアカデミックの現場から生まれた研究シーズを事業化するには、ビジネスに精通する経営者の不足をはじめとして、多くの課題が立ちはだかります。本プログラムでは、研究シーズと経営者候補とのマッチング及び創業メンバーの組成をはじめ、メンターによる資金調達や、顧客

獲得における専門的な助言を受けながら事業計画のブラッシュアップを行う等の支援が受けられ、より具体的に事業化を目指すことが可能です。

キックオフ当日は、HSFCに参画する道内の教育研究機関から11名の研究者（うち本学所属の研究者は8名）と、研究者とチームを結成した24名の経営者候補が参加しました。各チームは、今後4か月間ともに事業計画を策定するにあたり、チームの目標や役割分担等を設定し、事業化へ向けた活発な話し合いを行いました。

なお、今回の参加チームは全て11月2日（土）に東京都内にて開催した、経営者候補人材とのプレマッチングイベントにおいて結成されており、研究者が研究内容をプレゼンし、総勢44名

の経営者候補とのマッチングに取り組んだ結果、11件の研究シーズでマッチングが成立したものです。これらの経営者候補は、運営側が研究者から事前に聴取した「理想の経営人材像」を基に選定され、研究シーズと親和性のある業界経験及び専門性、並びにこれまでの本学及び北海道との縁を考慮することで、マッチングをスムーズに行うことが出来ました。

本プログラムは令和7年3月に札幌市内にて成果報告会の開催を予定しており、11チームの今後の活動に期待が寄せられています。

（産学・地域協働推進機構）



11月2日のマッチングイベントの様子



12月2日のキックオフイベントの様子

カリフォルニア大学バークレー校「Berkeley SkyDeck」チームが本学を来訪

12月5日（木）に、米国カリフォルニア大学（以下、UC）バークレー校のスタートアップ養成機関である「Berkeley SkyDeck」チームのキャロライン・ウィネット代表とジェネラルマネージャー（以下、GM）のシビル・チェン氏が、日本貿易振興機構（以下、JETRO）ロサンゼルス事務所の梶田 朗所長及び同機構北海道貿易情報センターの相馬巳貴子所長とともに、寶金清博総長及び瀬戸口剛理事・副学長らを来訪しました。

Berkeley SkyDeckは、平成24年にUCバークレー校内に開設された、世界最高峰を誇るスタートアップ養成機関であり、気候、半導体、宇宙、農業等を主要な支援技術分野とする多様なスタートアップ創出プログラムを運営しています（<https://skydeck.berkeley.edu/>）。一昨年11月には、JETROとの間で、スタートアップ支援プログラムの開発を協力支援するMOUを締結し、日本の大学もMOUの賛同大学として参画することが可能となっていることから、

昨年8月の寶金総長の訪米時に、本学も参画する意向を表明していました。

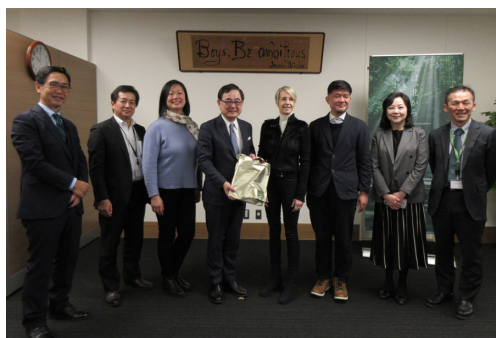
今回の来訪では、寶金総長より北大が進める産学連携やスタートアップ推進施策の状況について説明がなされ、MOUへの参画を改めて確認するとともに、ウィネット代表からはBerkeley SkyDeckプログラムの現状のほか、1月に発足する米国新政権下での政策の見通し等について意見が述べられました。また、学生向けブートキャンプや半導体の人材育成プログラムの紹介があり、北海道内でのスタートアップ支援や人材育成での協働の可能性について意見交換し、今後も継続して情報共有を行っていくことが確認されました。

寶金総長らとの意見交換後は、学内を見学しつつ北キャンパスまで移動し、フード&メディカルイノベーション国際拠点にて、本学教職員、学生及びSTARTUP HOKKAIDO関係者を集めたミニセミナーを開催しました。セミナーでは、まずは本学卒業生でもある梶田所長より米国西海岸ベイエリア

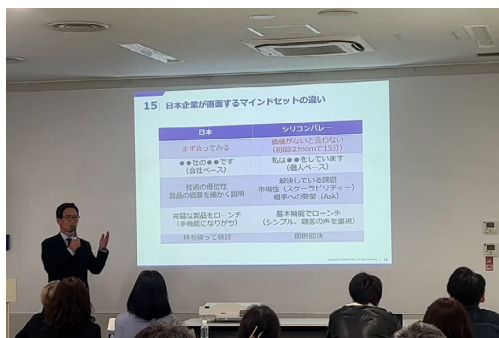
のイノベーションシステムの状況について紹介があり、続いてウィネット代表及びチェンGMより、シリコンバレーにおけるBerkeley SkyDeckの役割や日本人学生を含めた起業支援の事例紹介がありました。また、セミナー後半では、STARTUP HOKKAIDOの鈴木量平氏より北海道内でのスタートアップ支援活動の紹介がされたのち、現役北大生の起業家4名より自身のビジネスについての発表があり、Berkeley SkyDeckチームと意見交換し交流を深めることができました。

産学・地域協働推進機構では、今年度新たに機構内に設置された産学連携グローバル推進室を軸として、今後もこのような国際的な産学連携やスタートアップ創出及び人材育成の推進を進め、本学の国際的価値の向上に取り組んでいきます。

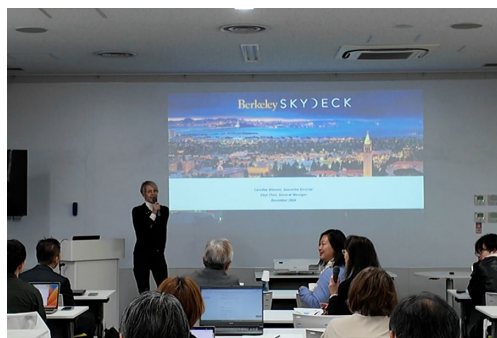
（産学・地域協働推進機構）



総長室での来訪者一行



ミニセミナーでの梶田所長の講演



ミニセミナーでのウィネット代表の講演

「巖鷲寮（佐藤・新渡戸記念寮）」の創立記念式典（寮祭）で、横田 篤理事・副学長が講演

11月23日（土・祝）に、巖鷲寮（がんじゅうりょう 佐藤・新渡戸記念寮）の創立記念式典（寮祭）が開催され、横田 篤理事・副学長が「北海道大学のSDGsの歴史と現在地」と題して講演を行いました。

巖鷲寮は、昭和2年に創立された学生寮です。北海道帝国大学に新設された医学部の第1期生になるべく予科に入学した4人の学生が、当時の佐藤昌介総長に熱心に働きかけ、今のクラーク会館付近のキャンパス内に建設されました。現在も北海道大学生協同組合本部前には本寮設立の地として、記念プレートが掲示されています。平成11年に開寮した現在の4代目「巖鷲寮」は、札幌農学校校長、東北帝国大学農科大学学長、北海道帝国大学初代総長を歴任された佐藤昌介先生と、佐藤先生の盟友であり、本寮を訪問したこと

もある新渡戸稲造博士から名前をとって「佐藤・新渡戸記念寮」と称されています。創立当初、本寮は、旧南部藩にゆかりのある男子学生（岩手、青森県出身者）のために設立・運営されてきましたが、現在では、全国から男子学生のみならず女子学生も入寮しています。

本式典で、横田理事・副学長は、佐藤先生のご尽力により、北海道大学は世界最大の研究林（国土の0.2%）、広大な農場を保有するに至ったこと、こうしたフィールド資産を活用して、SDGs課題解決の中核をなすフィールドサイエンスに強みを持つ大学として発展してきたこと、THEインパクトランキングで5年連続国内1位の評価を得ていること、令和5年には「HU VISION 2030」を、同6年には「北海道大学サ

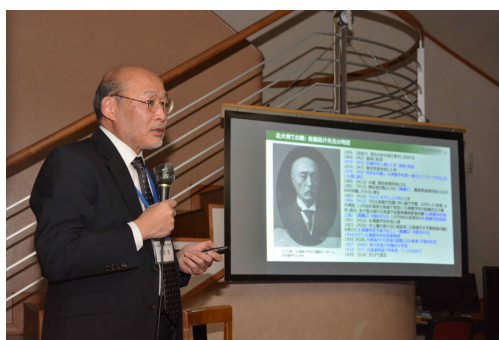
ステイナビリティ宣言」を策定したことなどを説明するとともに、様々な専門分野において、本学で学ぶこと自体の価値や素晴らしさを学生の頃から理解してもらいたいことを伝えました。また、令和8年に創基150周年を迎えるにあたり、「光は、北から」を合言葉に、世界の課題解決に貢献する大学を目指していることも説明しました。

本式典ではこのほかに、寮生と横田理事・副学長との懇談、寮所蔵品の説明、寮内見学ツアーの時間が設けられ、その後、現役の寮生、佐藤・新渡戸記念寮役員との懇親食事会の時間も設けられました。

（サステイナビリティ推進機構）



寮生・関係者との集合写真
（前列右から3人目：横田理事・副学長）



講演を行う横田理事・副学長



横田理事・副学長と寮生との懇談の様子

クイーンズ大学副プロボストが来学、横田 篤理事・副学長とサステナビリティに関する意見交換を実施

11月27日（水）に、クイーンズ大学（カナダ）のサンドラ・デン・オッター副プロボスト（グローバルエンゲージメント担当）が来学し、横田 篤理事・副学長（最高サステナビリティ責任者）、出村 誠総長特命参与（サステナビリティ推進）及び加藤 悟サステナビリティ推進機構教授と意見交換を行いました。

初めに、横田理事・副学長から、本学の歴史とサステナビリティに関する取組について紹介があり、本学は明治9年に札幌農学校として創基し、現在は12学部・21大学院を有する基幹総合大学として世界の課題解決に貢献していることを説明しました。また、THEインパクトランキングにおいて5

年連続国内1位であること、令和3年8月には大学運営組織の一つとしてサステナビリティ推進機構を設置し、全学的な取組としてサステナビリティを推進していること、同6年8月には北海道大学サステナビリティ宣言を策定したことなどを紹介しました。

次に、オッター副プロボストから、クイーンズ大学はTHEインパクトランキングで令和5年に世界3位、同6年に世界8位を獲得し、世界のSDGs活動を牽引する大学であること、SDGsのゴール別に様々な研究活動を行い、研究テーマごとに寄附や外部資金を獲得していること、学生も社会問題の解決につながるテーマで積極的に研究活動していることなどが紹介されました。

オッター副プロボストは、北海道大学サステナビリティ宣言を高く評価し、学内外のエンゲージメントをどのように高めているかについて質問され、横田理事・副学長からは、SDGsを共通言語として、学外では地域の自治体などと協働することで学外エンゲージメント（共感）を得ていること、学内ではFD・SDを通じて学内エンゲージメント（一体感）の醸成を図っていることを説明するなど、サステナビリティに関する活発な意見交換が行われました。

（サステナビリティ推進機構）



オッター副プロボスト（左）と横田理事・副学長（右）による記念品交換



参加者との記念撮影（左から加藤教授、オッター副プロボスト、横田理事・副学長、出村総長特命参与）

WOMAN EXPO 2024 Winterで北大ブランドを紹介

サステナビリティ推進機構は、産学・地域協働推進機構及び東京オフィスの協力を得て、11月30日（土）に東京ミッドタウンで開催された「WOMAN EXPO 2024 Winter」にブースを出展しました。

本イベントは、女性がより一層活躍できる環境づくりを応援する「日経ウーマノミクス・プロジェクト」の一環として平成26年から始まった“働く女性に向けた総合イベント”で、株式会社日本経済新聞社及び株式会社日経

BPが主催しています。

当日は、北大短角牛のビーフジャーキー、北大牛乳、北大おかき、玲瓏（シードル）、北大ラズベリークランチチョコ、北大クラークラスクといった北大ブランド認定商品を各100食分準備し、600人以上の来場者に試食していただきながら、本学のサステナビリティに関連した研究や取組を紹介しました。

また、会場では全ブースを巡ってスタンプを集めると抽選会に参加できる

スタンプラリーが開催され、本学からは、当選賞品として、MIND食クッキー、北大完熟ドライりんご、北大完熟りんごゼリー、シマエナガミニタオルハンカチを提供しました。

今後もサステナビリティ推進機構は、様々な機会を通じて、本学のサステナビリティに関連した研究成果や取組を積極的に発信していく予定です。

（サステナビリティ推進機構）



北海道大学ブースの様子（左から、加藤 悟サステナビリティ推進機構教授、七尾佳菜産学・地域協働推進機構学術研究員、天野 斉同機構特任教授）

エコプロ2024に出展

サステナビリティ推進機構及び大学院教育推進機構は、12月4日（水）～6日（金）に東京ビッグサイトにて開催された、一般社団法人サステナブル経営推進機構及び株式会社日本経済新聞社主催のエコプロ2024*にブースを出展しました。

ブースでは、本学のSDGs達成への貢献に関する取組について職員が紹介するとともに、博士後期課程の学生が「自身の研究テーマがどのように社会に還元され、世界の課題解決（SDGs）につながるのか」について考え、制作したポスターを「博士学生が描く、64のミライ」と題して展示し、参加者に対して学生が直接説明を行いました。

また、北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林が行っている「幌内川の魚類調査」「毎木調査と炭素蓄積量」及び「哺乳類調査」についての紹介のほか、総合博物館からは、恐竜パズルや実際に触れることができるヒグマ・アザラシの毛皮を展示しました。

開催期間中には、開場と同時に多くの小中学生がブースを訪れ、あらかじめ調べてきた本学のSDGsに関する取組について質問をしたり、博士後期課程の学生や職員の説明を熱心に聞いたりしていました。また、本学卒業生のほか、ブースを出展した他大学や企業等からの訪問も多く、本学の唯一無二の特徴や取組を知ってもらおうきっかけ

となりました。

今後も、サステナビリティ推進機構及び大学院教育推進機構は、社会における本学のステークホルダーを増やすとともに、大学の活動を積極的に発信していく予定です。

*エコプロとは、日本の企業、行政機関及び教育機関等、約500団体が参加して環境配慮型製品やサービス（エコプロダクツ・エコサービス）等の展示を行う日本で最大規模の一般向け展示会です。

（サステナビリティ推進機構、
大学院教育推進機構）



用意した説明ボードで本学の取組を紹介



博士後期課程学生の研究紹介に見入る小学生



苫小牧研究林の魚類調査の説明



ヒグマの毛皮など触れられる展示に人気が集まった

令和6年度第2回サステナビリティ推進員会議を開催

サステナビリティ推進機構は12月17日（火）に、令和6年度第2回サステナビリティ推進員会議をオンラインで開催しました。本会議には、各部局のサステナビリティ推進員及び同補佐等78名が出席しました。

はじめに、サステナビリティ推進機構長の横田 篤理事・副学長が開催の挨拶を行い、「サステナビリティ推進員制度」及び令和6年8月に策定した「北海道大学サステナビリティ宣言」について説明しました。続いて、施設部施設企画課より「令和6年度冬季の省エネルギー対策」についての説明を行い、「省エネルギーの手引き（令和5年12月改定）」*1を活用し、省エネルギーの取組を一層推進するよう協力を要請しました。

次に、平 裕サステナビリティ推

進機構特任助教が、令和6年10月に策定した「北海道大学GHG*2インベントリ2022」について、施設部環境配慮促進課が「ごみの適正な分別*3」について、横田理事・副学長が「出張FD・SD」の実施について、それぞれ説明を行いました。特に出張FD・SDについては、SDGsを含むサステナビリティに関する研修として全教職員を対象に実施予定であること、過去に実施した内容はオンデマンド視聴が可能である旨の説明がなされました。そして最後に、加藤 悟サステナビリティ推進機構教授から「北海道大学×SDGsへの情報提供」についての依頼がありました。

サステナビリティ推進機構では、今後も引き続き、部局等と連携を図りながら、サステナビリティ推進に関

する活動を実施してまいります。これらの活動はキャンパスの維持・管理や財政等に密接に関わる課題でもあり、本学として持続可能な社会の実現及び未来づくりに貢献していくためにも、全学で一丸となって進めていきたいと考えています。皆様のご理解・ご協力の程、よろしくお願いいたします。

*1 省エネルギー対策の手引き（学内限定）

<https://www.facility.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2023/12/9419005900f1bf22c8afa7da6ab89f27.pdf>

*2 GHG：Greenhouse Gas（温室効果ガス）

*3 ごみ・廃液処理（学内限定）

<https://www.facility.hokudai.ac.jp/%e5%ad%a6%e5%86%85%e5%90%91%e3%81%91/epc>

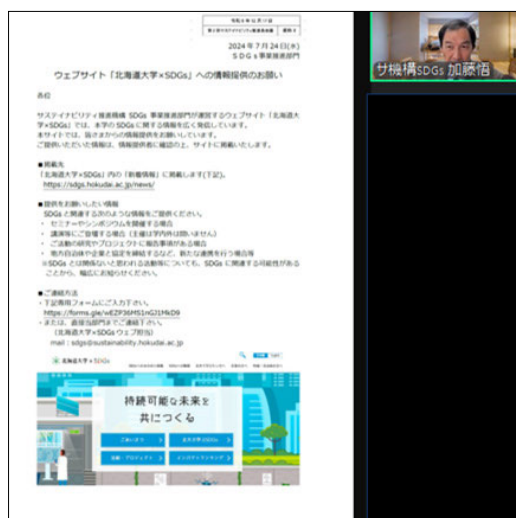
（サステナビリティ推進機構）



「北海道大学サステナビリティ宣言」の説明をする横田理事・副学長



「北海道大学GHGインベントリ2022」の説明をする平特任助教



「北海道大学 x SDGsへの情報提供」の説明をする加藤教授

議 題

1. サステナビリティ推進員制度について
2. 北海道大学サステナビリティ宣言の策定について
3. 令和6年度冬季の省エネルギー対策について
協力要請
4. 北海道大学GHGインベントリ2022策定について
5. ごみの適正な分別について
6. 出張FD・SDについて
7. 北海道大学 x SDGs への情報提供について

「きたみてガーデンSDGs農園」プロジェクトを含む 北海道マラソン2024 SDGsの取組が日本陸連アスレティックス・ アワード2024で「BEST THINK賞」を受賞

サステナビリティ推進機構が北海道マラソン2024組織委員会と協力実施した「きたみてガーデンSDGs農園（以下、SDGs農園）」*1プロジェクト及び本学の木材を使用したモニュメント制作を含む「北海道マラソン2024 SDGsの取り組み」*2が、日本陸上競技連盟（以下、JAAF）の「アスレティックス・アワード2024」において「BEST THINK賞」を受賞しました。この賞は、JAAFが2022年にスタートしたものであり、陸上を通じた社会貢献を目指すSDGsプロジェクト「#LETSTHINK_（レッツシンク）」における最高賞です。

12月19日（木）に行われた表彰式では、本学、北海道マラソン2024組織委員会及び大会パートナー企業であるよつ葉乳業株式会社に楯が授与されました。

今後も、サステナビリティ推進機

構は、札幌キャンパス内の資源循環を図りながら北海道マラソンを持続可能な大会とするために、同マラソン組織委員会等と連携し、様々な取組を実施していきます。

*1「SDGs農園プロジェクト」

札幌キャンパスで回収された落葉から出来た腐葉土の利活用を通して、キャンパス内の資源循環の在り方について、本学学生・教職員だけでなく地域社会とともに考えることを目的としたプロジェクト。総合博物館の中庭に設置したSDGs農園は、北方生物圏フィールド科学センター（以下、FSC）札幌研究林・生物生産研究農場、ミュージアムカフェほらす、総合博物館、施設部の協力を得ながら、本学教職員、北海道マラソン2024組織委員会及び本学学生を主体とした総合博物館のボランティアグループ「きたみてガーデン」が造成・管理している。

*2「北海道マラソン2024 SDGsの取り組み」（日本陸上競技連盟公式サイトより）

北海道マラソンを持続可能な大会としていくため、様々なSDGsの取り組みを実施している。2024年大会の新たな取り組みとして、コースとなる北海道大学と連携し、キャンパスで回収された落葉からできた腐葉土を利活用して資源循環を図る「きたみてガーデンSDGs農園プロジェクト」で育てた野菜を、カーボローディングパーティでランナーに提供したり、構内のカフェでその野菜を使用したオリジナルメニューの販売を大会期間限定で行った。また大学の工事で伐採された木を折り返し地点のモニュメントに再利用した。大会パートナー企業であるよつ葉乳業との取組みでは、大会当日と、大会翌日にコースをきれいにしながら走るプロギングプロジェクトを実施した。

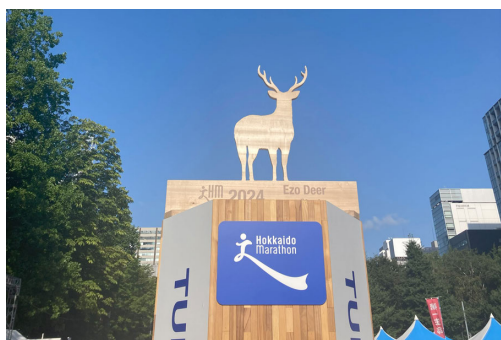
（サステナビリティ推進機構）



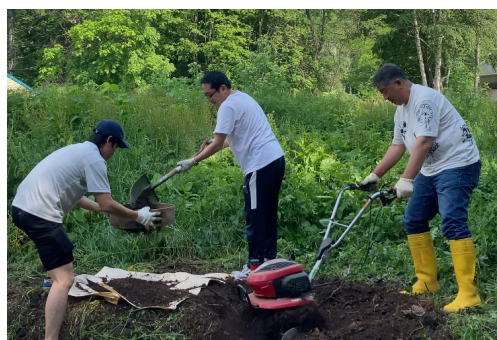
授与された楯を持つ林 忠一FSC連携URA（右から3人目）、松山元樹サステナビリティ推進機構特定専門職員（右端）



SDGs農園で収穫された野菜が提供された、大会前日のカーボローディングパーティ（ランナーの交流イベント）で振る舞われたサラダ



マラソンコースの折り返し地点に設置された、北大の木材を利用したモニュメント「エゾシカ」
※写真は大会前日の大通公園での展示の様子



SDGs農園の整備作業は6月から行われた。左から北海道マラソン2024組織委員会の勝山将平氏、西村孔佑施設部施設企画課係長、林連携URA

5大学主催Postgrad Job Fairを開催

12月2日（月）、大学院教育推進機構先端人材育成センター上級人材育成部門（I-HoP）は、留学生と留学生採用を行うグローバル企業との合同企業説明会兼交流会「Postgrad Job Fair in English」をオンラインで開催しました。

本事業は、日本の科学技術及び未来社会の発展に大きな影響力を発揮する高度専門人材としての外国籍研究者を輩出する5つの研究大学（北海道大学・奈良先端科学技術大学院大学・大阪大学・横浜国立大学・京都工芸繊維大学）と、外国人留学生の生活・就職支援サービスを展開する森興産株式会社とが連携して初めて企画したものです。今回は情報通信、素材、電機、製薬、検査機器、半導体などの各分野において基礎研究や技術開発に注力し、国内外に事業を展開する企業14社*が出展して、英語による活発な交流が行われました。

現在、留学生の日本国内就職需要が高まる一方で、就職活動やインターシップで求められる高い日本語レベル

が障壁となり、企業とのマッチングが上手く成立しない現状があります。これを踏まえ、本学では言語や国籍に関わらず優秀な留学生の国内定着を推進すべく、英語でのコミュニケーションをベースとした、企業と留学生との交流会を積極的に実施してきました。今回は、同様の課題を抱える優れた研究大学が集い、優秀な留学生の存在を広く産業界へ発信するとともに、日本語が苦手な留学生にとって有意義な機会となるよう、英語開催として共同企画しました。

当日は、主催した5大学に在籍する博士前期・後期課程留学生のほか、本事業の趣旨に賛同した複数の大学から留学生の申し込みがあり、総勢167名の留学生が参加しました。第一部では各社による3分間プレゼンテーションが行われ、第二部ではブレイクアウトルーム形式で各社個別企業説明及び質疑応答が行われました。3時間という限られた時間の中で、各企業のグローバル採用情報や留学生に求める人物像

について詳細な説明が行われたほか、各社の事業概要や将来の研究開発の方向性について知見を得るなど、カジュアルな雰囲気の中で活発な質疑応答が行われました。

日本国内ではこうした大学院留学生を対象とする英語対応の就職関連イベントは極めて稀少であり、グローバルマインドの醸成や留学生の日本定着に向け、本学は今後も他大学と連携して画期的な取り組みを積極的に企画・実施してまいります。

*参加企業：シスメックス株式会社、塩野義製薬株式会社、Apple Japan合同会社、ロート製薬株式会社、テュフ・ラインランド・ジャパン株式会社、NTT、三桜工業株式会社、リバネス株式会社、AGC、サムコ株式会社、構造計画研究所、株式会社日立製作所、デンカ株式会社、株式会社堀場製作所

（大学院教育推進機構先端人材育成センター）

公開シンポジウム「誰もがつながり合う共生のまちづくり ～演劇教育が創る未来のビジョン～」を開催

大学院教育推進機構リカレント教育推進部（以下、リカレント教育推進部）は、12月14日（土）に公開シンポジウム「誰もがつながり合う共生のまちづくり～演劇教育が創る未来のビジョン～」をクラーク会館で開催しました。

札幌市は、誰もがつながり合う共生のまちづくりを目指した条例の制定検討を進めています。リカレント教育推進部は、今年度、札幌市の「令和6年度大学と民間企業等との連携による公益的事業の推進事業補助金」の採択を受け「札幌市の劇団他と連携した演劇的手法による地域課題解決に取り組むプロジェクトマネージャー養成事業」を実施しています。来年度には、共生

のまちづくりを実現するコミュニティマネージャーの育成を目的とした、社会人向けの教育プログラムを実施する予定です。本シンポジウムは、そのキックオフに相当します。

シンポジウムには、作家・演出家の鴻上尚史氏を特別講師に招き、基調講演「コミュニケーションのヒント」を行いました。他者の気持ちを理解するエンパシーを体験するために、鴻上さんは、フロアに対して「『桃太郎』の犬はなぜ「きびだんご」ひとつで命がけの鬼退治に臨んだのか」と問いかけました。フロアからは「きびだんごがおいしかったから」「自分を認めてほしかったから」などのユニークな回答が寄せられ、60分の講義はあっという

まに終わりました。

休憩後、平成3年に障がい者雇用において労働大臣賞を受賞している株式会社アイワードの奥山敏康代表取締役社長が「会社は社会の縮図」と題した情報提供を行いました。50年以上にわたって民主的な会社の運営を行い、積極的に女性や障がいのある人を雇用するアイワードの経営方針について紹介がありました。また、本学リカレント教育推進部の種村 剛特任教授は「課題解決を大学で学び直してみませんか」として、地域の課題解決が求められている理由とリカレント教育推進部の取組を紹介しました。

（大学院教育推進機構）

実施内容

日 時：12月14日（土）14:00～16:00

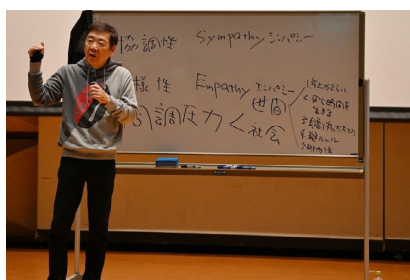
場 所：クラーク会館

参加人数：231名

主 催：北海道大学大学院教育推進機構リカレント教育推進部

共 催：一般社団法人劇団弦巻楽団、公益財団法人北海道演劇財団、札幌市まちづくり政策局制作企画部ユニバーサル推進室、北海道大学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部

協 力：北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部



講演を行う鴻上氏



情報提供を行う奥山氏



質疑応答の様子

（写真：usagiMark photo）

「北海道大学 2024 DEIキャンペーン 連続講演会」を開催

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部（DEI推進本部）では、本学が目指す「世界の課題解決に貢献する Diversity, Equity, and Inclusion (DEI)」に向けて、本学構成員がDEIへの理解をより一層深め共有することを目的に、全4回の連続講演会を開催しました。教職員・学生等延べ213名が参加しました。

・パープルリボン講演会「デートDVって知っていますか？～傍観者にならないために～」

日時：11月15日（金）11:15～12:45
会場：DEI推進本部
講師：志堅原郁子氏（一般社団法人アウェア認定・デートDV防止プログラム・ファシリテーター）

身近に起こるデートDVについて、実際にあった暴力の事例を交えながら、身体への直接的な危害の他にもデジタル暴力が深刻化していること、暴力は加害者・被害者を取り巻く社会環境が大きく影響したジェンダー規範に基づいて起こるものであること等をお話いただき、参加者はデートDVの実態について学び考える機会となりました。

・「DEIの視点からみる大学のイノベーションの創出とグローバルリーダーの育成」

日時：11月22日（金）15:30～17:00
会場：百年記念会館及びオンライン
講師：我喜屋まり子氏（京都大学経営管理大学院 客員教授）

ハイブリッド形式で行われた特別講演会には、総勢93名が参加しました。我喜屋氏のグローバルな経験に基づいた、今後の日本の大学に求められる組織改革、現在の世界における日本の立ち位置と今後把握すべきDEIの視点、学生への熱いメッセージを頂戴し、講演後には予定時間を超過するほど多くの質問にお答えいただき、盛況のうちに終了しました。

・「障害者週間」特別講演会「耳が聞こえなくなっても～難病の子供を持ち、大企業を辞めて起業するまで～」

日時：12月4日（水）11:15～12:45
会場：クラーク会館及びオンライン
講師：牧野友香子氏（株式会社デフサポ 代表取締役）

先天性の重度難聴がある牧野氏から、大学生活や職場で体験した様々な困難や、障がいと向き合いながらリー

ダーシップを発揮しキャリアを構築されてきた経験を、障がい者、女性、母親といった様々な視点でお話いただきました。さらに起業や海外移住など、障がいの有無に関わらず、人生やキャリアを切り拓く挑戦するマインドを学ぶ機会となりました。

・「未来を創る性と健康：プレコンセプションケアから始めるライフサイクルとキャリア設計」

日時：12月18日（水）11:15～12:45
会場：オンライン
講師：蝦名康彦氏（北海道大学大学院保健科学研究院 教授）

特に女性の健康課題に焦点を当て、月経、妊娠・出産、更年期と身体に起こる変化等、ライフサイクルとの関連性や健康維持の重要性について、産婦人科医としてのご経験も交えながら説明いただきました。プレコンセプションケアについて理解するとともに、ライフプランとキャリア形成を考えるヘルスリテラシーを高める機会となりました。

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）



「デートDVって知っていますか？～傍観者にならないために～」開催の様子



「DEIの視点からみる大学のイノベーションの創出とグローバルリーダーの育成」開催の様子



「耳が聞こえなくなっても～難病の子供を持ち、大企業を辞めて起業するまで～」開催の様子



「未来を創る性と健康：プレコンセプションケアから始めるライフサイクルとキャリア設計」開催の様子

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 講師が講義、見学を実施

10月25日（金）、北海道札幌南高等学校の1年生を対象に、6名の研究者が講義を実施しました。また、10月28日（月）は札幌日本大学高等学校の1年

生を対象に、10月31日（木）は札幌北斗高等学校の1～3年生を対象に、大学での学びや最新の研究について講義を実施しました。

講義を受講した生徒、及び教員の皆様から、講義レポートが届きましたのでご紹介します。

日 時：2024年10月25日（金）

1 回 目：14：15～15：05

2 回 目：15：15～16：05

会 場：北海道札幌南高等学校

「『私』の行為に潜む『他者』の影響」 教育学研究院 教授 阿部匡樹

参加生徒：1年生 1回目 30名/2回目 30名

高校の教員からは「参加している生徒はアンケートに答えたり、手を動かしたりなど、阿部先生の研究内容を自分の行動、体験を通して、学ぶことができたように思います。なるほど、そ

うだったのかという気持ちになり、新しい知識を得ることの楽しさを感じられた講義でした」などの感想がありました。



「材料の表面を変えれば、世界が変わる！」 工学研究院 教授 菊地竜也

参加生徒：1年生 1回目 34名/2回目 32名

参加した生徒は「同じアルミニウムでも表面の構造を変えるだけで、見た目が同じで硬さの全く違う棒や、油でさえくっついてしまう板を作ることができるというのが衝撃的でした。ま

た、最後に見せていただいた菊地先生の元素コレクションにも、化学の世界への興味をととてもそそられました」との声を寄せました。



（提供：工学研究院）

「新薬開発で動物も病気から救える時代に」 獣医学研究院 教授 今内 寛

参加生徒：1年生 1回目 33名/2回目 32名

高校の教員からは「大学での学びを模型を使って分かりやすく紹介するだけでなく、実際に研究により助かった命（ペット）の事例など実体験を交え

ながらの説明により獣医学の研究成果のやりがいを感じる講義となっており、生徒の興味関心が高まる内容でした」と感想を寄せていました。

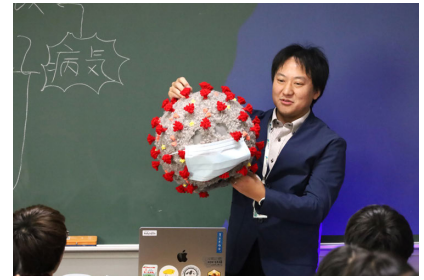


「新種のウイルスを見つける」 人獣共通感染症国際共同研究所 准教授 松野啓太

参加生徒：1年生 1回目 30名/2回目 35名

講義を傍聴した教員は「本校では医療系、薬学系への進学希望者が多く、近年大きな影響を与えた新型コロナウイルスなどのウイルス学には興味津々

でした。実際にフィールドワークから新種のウイルスを発見するまでの道のに特に興味を示していたように見受けられました」と振り返りました。


「心の哲学とAI」 文学研究院 准教授 宮園健吾

参加生徒：1年生 1回目 31名/2回目 31名

講義を受けた生徒は「そもそも『心』とは何かを深く考えたことがなかったので、心の定義や哲学的な思考実験の方法、AIの特性など、大変興味深い内容でした。哲学と聞くと文系

のイメージがありましたが、研究手法は理系の要素も多く含まれている学問分野であると感じました」と新たな発見をしていました。


「未来社会を考える—大学での学びと研究—」 大学院教育推進機構 教授 宮本 淳

参加生徒：1年生 1回目 30名/2回目 29名

参加した生徒からは「大学院生の名畑さんとのお二人による具体的な研究内容についてだけではなく、その研究に至った経緯なども聞くことができ、大学での研究についての理解を深める

ことができたと思います。文系、理系に関わらず、大学進学希望者全員にとってためになる講義でした」との声が聞かれ、大学での研究について強く関心を持ったようでした。



日 時：2024年10月28日（月）13：40～14：50

会 場：札幌日本大学高等学校

「大学・大学院での専門と就職とキャリアデザイン」 高等教育推進機構 特任講師 川上あき

参加生徒：1年生 139名

講義を受けた生徒からは、「今まで不安だらけだった将来が少し楽しみになった」「高校の時に、しておくといふことなどが聞けてよかった」「自分がどういう人間なのかをしっかり理解

して、周りとは比べ過ぎずに、自分に合った方法で勉強に集中できる環境作りを進めていきたい」など、前向きな感想が寄せられました。



日 時：2024年10月31日（木）15：45～16：45

会 場：札幌北斗高等学校

「医療・保健を変革するデータヘルス/AI」 保健科学研究院 教授 小笠原克彦

参加生徒：1～3年生 26名

受講した生徒たちからは、「北海道の医療における課題が理解でき、自分にも何かできないかと考えた」「情報

やデジタルツールをうまく活用することで医療従事者の負担軽減の方策を考えたい」などの感想が寄せられました。



アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は北海道の高校等を対象に29名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ
<https://www.hokudai.ac.jp/research-times/academic-fantasista/>
・Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

（広報・社会連携本部）



リサーチタイムズ



フェイスブック

■ 部局ニュース

クリエイティブワークショップ「Adobe Expressを使って魅力的なコンテンツを作ろう！～誰でもかんたんにできる。もっと良くなる。その技術と知識」を開催

文学研究院教養深化プログラムでは、アドビ株式会社と大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンターとの共催で、12月6日（金）にクリエイティブワークショップ「Adobe Expressを使って魅力的なコンテンツを作ろう！～誰でもかんたんにできる。もっと良くなる。その技術と知識」を開催しました。

このワークショップは10月から本学がアドビ株式会社のグローバルで推進するコンソーシアム「Adobe Creative Campus」に加盟し、ウェブサイト上でコンテンツを簡単に制作できるアプリであるAdobe Expressのライセンスが、全ての学生及び教職員に付与されたことを受けて行われました。

参加した大学院生7名はAdobe Expressの操作方法を事前にオンラインで学習し、ワークショップ当日に臨みました。当日の講師は、オープンエデュケーションセンターの藤岡千也特

任講師が務めました。参加者は各自のパソコンを持ち込んで、実際に手を動かしながらワークショップを行いました。参加者はワークショップの時間内に教養深化プログラムまたは教養深化プログラムの授業をPRするポスターを制作することを目標としました。制約なくフォントを使用できたり、コンテンツを共有しお互いにコメントをしたりするなど、Adobe Expressのライセンスが付与されていることによる機能を活かしながらコンテンツの制作は進められました。コンテンツ制作に慣れていない参加者もありましたが、ワークショップが開催された3時間のうちにほぼ完成された作品を制作することができました。参加者からは、グループワークでの意見交換を通じて新たな視点を得られた、デザインの奥深さに気づき、深い学びを得られたとの声が寄せられました。また、Adobe Expressの実用性や手軽さを実感したなど、概

ね好意的な感想が寄せられました。

後日優秀作品として2作品が選定され、実際に来年度の教養深化プログラムの広報活動に利用されるほか、制作した2名はアドビ株式会社より2025年2月に開催される「Adobe MAX Japan 2025」に招待されました。

教養深化プログラムでは、アドビ株式会社との協力のもとデジタルクリエイティブの基礎的な知識を得る授業や地域と連携し実践的にコンテンツを制作する授業を展開しています。オープンエデュケーションセンターでもアドビ株式会社との共同研究によるカリキュラム開発を行っています。今後もこうしたワークショップや授業などを通してデジタルリテラシーの育成に取り組んでいきます。

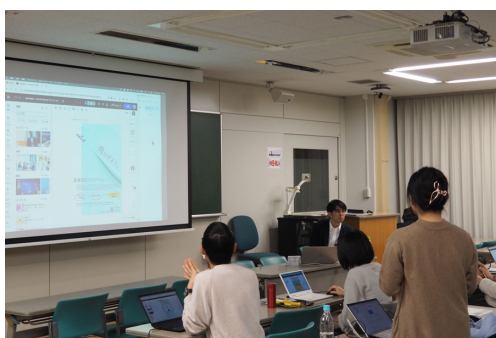
（文学研究院、大学院教育推進機構）



藤岡特任講師によるレクチャー



コンテンツ制作を進める



学生による完成した作品の発表

経済学部で特別講演会を開催

経済学部では11月29日（金）に、日興リサーチセンター株式会社理事長の山口廣秀氏による「中央銀行の歴史・役割・理念」と題する特別講演会を、文系共同講義棟において開催しました。

山口氏は、昭和49年に日本銀行に入行、平成20年から同25年には日本銀行副総裁に就任されるなど、約40年間にわたり日本銀行において様々な業務の経験をされています。講演会には、経済学部の学生・教員を中心におよそ60名が参加し、熱心に聴講していました。

講演会では、山口氏から、ご自身の

日本銀行における経験を織り交ぜつつ、貴重なお話を熱く語っていただきました。具体的には、諸外国及びわが国における中央銀行の歴史、現代の中央銀行の4つの役割（銀行券の発行、物価の安定、金融システムの安定、決済システムの安定）と3つの理念（公共性、独立性、透明性）、そして、今後中央銀行の役割と理念は変わるのか？について、お話をいただきました。

講演会の最後には、デジタル通貨の今後の見通し、中央銀行である日本銀行と我々国民との関わり方などについて、

て、参加した学生から積極的な質問が行われました。これに対して、山口氏からは、あくまでも私見であることを前提としつつ、学生へのアドバイスを含めた分かりやすい説明が行われました。

経済学部では、本学部と関連が深いと考えられる学外の民間組織や行政機関との連携を引き続き密にしながら、このような講演会などを開催していきたいと考えています。

（経済学院・経済学研究院・経済学部）



講演の様子



講師を務めた山口氏

経済学研究院地域経済経営ネットワーク研究センターがシンポジウムを開催

経済学研究院地域経済経営ネットワーク研究センターでは11月30日（土）に、「ワイン産業のいまと未来 ～北海道から世界へ～」と題して、シンポジウムを開催しました。今年度のシンポジウムは、北海道経済学会との共催で行われ約80名の参加がありました。

講演者として、北海道大学北海道ワイン教育研究センター長で農学研究院の曾根輝雄教授、余市町長で当研究センターの客員研究員でもある齊藤啓輔氏、F PLANNING LAB合同会社代表で元・富良野市ぶどう果樹研究所（ふらのワイン）製造課長の高橋克幸氏のお三方をお招きし、農学研究院の東山 寛教授が司会を務めました。

まず曾根教授より「北海道におけるワイン産業とその支援体制の拡がり」と題する基調講演をいただきました。ワインの作り方からはじまり、テロワールやワインの経済効果、そして北大が果たす道内ワインづくりのセンターとしての役割など、「北海道から世界

へ」のサブテーマに相応しい内容でした。次に齊藤町長より、余市町におけるワイン生産の取り組みや、まちづくりとの関係についてお話をいただきました。外交官だったご経験を活かして、フランス・ブルゴーニュのジュブレ・シャンベルタン村との友好都市協定を結んだエピソードや、ドイツ系からフランス系の葡萄品種への植え替えに町として補助金を出すことで、より付加価値の高いワインづくりを目指している点など、参加者が唸る興味深い内容でした。高橋氏からは、地球温暖化と北海道における今後のワインづくりについて、詳細なデータに基づき、ワインの造り手の立場からお話をいただきました。北海道が確実にワイン生産の適地になっていることや、今後の気候変動を見据えて栽培する葡萄の品種を選定することの必要性、そして飲み手を育てることの重要性など、北海道におけるワイン造りにとって忘れてはならない問題点や課題が明快に示さ

れました。これらを受け、また会場からの質問を踏まえて、東山教授のファシリテーションによって、3名の講演者の間で北海道におけるワインの可能性や未来に関する活発なディスカッションが行われました。

シンポジウム終了後には、北海道ワイン教育研究センターのご協力を得て、道産ワインの有料試飲も実施されました。多くの参加者の皆様が、シンポジウムの内容を思い出しながら特徴ある道産ワインを味わい、ワインに対する思いをいっそう深めることが出来たのではないかと思います。

今回のシンポジウムがきっかけになって、北海道のワインに対する関心が高まると期待するとともに、本研究センターでは、今後も折に触れて北海道におけるワインについて多面的に考察していきたいと思います。

（経済学院・経済学研究院・経済学部）



講演する曾根教授（左）・齊藤町長（中央）・高橋氏（右）



シンポジウムの様子



パネルディスカッションの様子

経済学院・経済学研究院・経済学部で令和6年度外国人留学生懇親会を開催

経済学院・経済学研究院・経済学部では、12月12日（木）に、留学生、日本人学生、教職員が相互に理解と親睦を深めることを目的として、令和6年度外国人留学生懇親会を開催しました。

当日は、留学生やそのチューター・サポーター、そして国際交流に関心の

ある日本人学生と関係教職員など約35名が参加し、交換留学経験者による司会のもとパーティーゲームを行ったほか、出席者同士が様々な言語で積極的に交流し合い、大変和やかな雰囲気の中に閉会しました。閉会後は引き続き有志で二次会が開催され、さらに親

睦を深めていました。

本懇親会は、来年度以降も経済学院・経済学研究院・経済学部の伝統行事として継続的に開催し、国際交流に取り組んでいきます。

（経済学院・経済学研究院・経済学部）



挨拶を述べる久保淳司経済学研究院院長



懇親会の様子

「社会体験ワークショップ」をオープンコースウェアで公開 ～北海道大学、北洋銀行ほかによる社会体験のための実践的授業～

経済学部は、12月20日（金）、株式会社北洋銀行と共同で開講している全学教育科目「社会の認識『社会体験ワークショップ』」をオープンコースウェアで無償公開しました。

本ワークショップは、令和4年度から引き続き開講しているものであり、今回は今年4月～7月に実施した授業の一部をコンテンツ化しています。

各講義では、北海道を代表するゲスト企業等10社との対談形式で、実社会の課題や展望についてディスカッションを行いました。

企業説明会とは異なり、ゲスト講師のリアルな体験談やキャリアについての授業は少なく、道外出身が多い北大生にとって、道内企業を理解する貴重な

機会となりました。

オープンコースウェアでは、ゲスト企業等10社のうち、5社の講演動画と7社の講義資料を公開しています。講演動画では現役社員であるゲスト講師のリアルな体験談を、講義資料ではゲスト企業等の取組を閲覧できます。

なお、「社会体験ワークショップ」は、来年度も開講予定です。

令和6年度公開対象のゲスト企業等（全7社）※50音順：

株式会社アレフ、岩田地崎建設株式会社、株式会社北洋銀行（兼コーディネーター）、北海道放送株式会社、北海道ワイン株式会社、Rapidus株式会社、Letara株式会社

公開先URL：

北海道大学オープンコースウェアWEBサイト

「社会の認識『社会体験ワークショップ』」

<https://ocw.hokudai.ac.jp/lecture/social-experience-workshop2024>



公開先WebページのQRコード

（経済学院・経済学研究院・経済学部）

北海道大学 オープンコースウェア
HOKKAIDO UNIVERSITY OPEN COURSE WARE

社会体験 ワークショップ

北海道大学、北洋銀行による社会体験のための実践的授業

北海道を代表するゲスト企業等7社との対談形式で行われた授業の様子を、北海道大学オープンコースウェアWEBサイトで無償公開します。講演動画・資料では、ゲスト企業等の取組をはじめ、現役社員であるゲスト講師のリアルな体験談を閲覧することができます。

授業科目 全学教育科目・主題別科目
「社会の認識『社会体験ワークショップ』」

対象学生 1年以上の全学部学生
（主に第1年生を対象）

責任教員 北海道大学
大学院経済学研究院
教授 平本 健太

講師 北海道大学
非常勤講師 宇野 健司

コーディネーター 株式会社北洋銀行
公金・地域産業支援部

北海道大学オープンコースウェア WEBサイト
「社会の認識『社会体験ワークショップ』」
<https://ocw.hokudai.ac.jp/lecture/social-experience-workshop2024>

北海道大学 **北洋銀行**

こちらからアクセス

北海道大学オープンコースウェアについて
北海道大学の講義や公開講座の映像教材・講義資料などの、
講義関連情報を公開しております。
自学自習はもちろん、教育の現場でもご活用ください。

<https://ocw.hokudai.ac.jp/about>

開催日	講演テーマ	ゲスト企業等	動画	講義資料
4月16日	地域金融機関の使命とキャリア形成	北洋銀行 株式会社北洋銀行		○
5月7日	北海道とともに宇宙へ	LETARA Letara株式会社	○	○
5月14日	半導体工場の全自動化を支えるCIMシステム＝私の会社人生	Rapidus Rapidus株式会社	○	○
5月21日	びっくりドンキーから学ぶ、キャリアセミナー	アレフ 株式会社アレフ		○
5月28日	地域の放送局がメディアの枠を超えて地域を盛り上げる	HBC 北海道放送 北海道放送株式会社	○	○
6月4日	“まちづくりの先頭に。” ごみが世界を救う？	岩田地崎建設 岩田地崎建設株式会社	○	○
6月11日	ワイン産地「北海道」と、私のキャリア	北海道ワイン 北海道ワイン株式会社	○	○

※動画はゲスト講師の講演部分のみ。講義資料は公開用資料であり授業で使用したものと異なりますので、ご注意ください。

オープンコースウェアのポスター

生命科学院が「IGPシンポジウム」を開催

生命科学院は12月4日（水）、北キャンパス総合研究棟にて「IGPシンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムではInternational Graduate Program (IGP) の協力のもと、生命科学院所属の博士後期課程学生が集い、それぞれが専門に展開している研究の進捗・成果について、口頭発表やポスター発表を通して活発にディスカッションを行いました。多様な専門分野を擁する本学院では、このよ

うな異分野研究交流を通じた、学際的な研究センスをもつ研究人材の育成を特に重視しています。

今回はインドのトップ大学の一つ、インド工科大学ボンベイ校で発生生物学を研究するスリラジャ・ナイア博士に基調講演をご担当いただき、口頭・ポスター発表セッションでも熱い議論にご参加いただきました。本シンポジウムは、北大という世界中から若手研究者が集まる環境において活発な討論

を行うことにより、若手研究者が将来的に科学者として国際的に活躍するための一助となりました。

開催にあたりご指導・ご協力をいただいた先生方、ご支援をいただいた事務担当者の方々、そして準備・運営にご協力いただいた留学生・学生の方々に深く御礼申し上げます。

（生命科学院）



留学生による口頭発表



シンポジウム参加者の集合写真

工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催

工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、毎年「こころの健康セミナー」を開催しています。

本年度は、12月13日（金）に「工学系部局なんでも相談室」カウンセラーである石原一人氏（合同会社アド・レ

ジリエンス カウンセラー）を講師として、ハイブリッド形式により開催しました。

本セミナーでは「話を聴いてくれる？」と言われたら～相談のファーストタッチ～」と題し、架空の相談事例を交えて、悩みを抱えた方の相談を受ける時の心構えについて講演が行われ、

参加した教職員はその認識及び理解を深めました。参加者からは有益であった旨の感想が多く寄せられ、有意義なセミナーとなりました。

（工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター）



講演する石原氏



会場の様子

公開セミナー「山岳観光とアドベンチャーツーリズム」を開催

観光学高等研究センター（以下、CATS）及び国際広報メディア・観光学院では、12月21日（土）、学術交流会館で公開セミナー「山岳観光とアドベンチャーツーリズム」を開催し、学内外から200名以上の参加がありました。

CATSは令和5年9月に株式会社ゴールドウインと包括連携協定を締結し、スポーツやアウトドア分野におけるツーリズム研究を共同して深化させることを目的として事業を展開しており、本セミナーはその一環として実施されたものです。

CATSの小泉大輔准教授が司会進行を務め、山村高淑センター長の開催趣旨説明に続いて、『グレートトラバース 日本百名山ひと筆書き』でおなじみの、プロアドベンチャーレーサーの田中陽希氏による特別講演が行われま

した。田中氏の講演は「百名山ブームに続く、トラバースブームの考察」と題し、自身のこれまでの経験から「歩く」ことを通して得られる多様な体験の価値について提起されました。

後半は、CATSの木村 宏客員教授がファシリテーターとして話題提供のもと、「産学連携によるアドベンチャーツーリズムの推進に向けて～ハイキングを考える～」をテーマとして、株式会社ゴールドウイン ザ・ノース・フェイス事業本部の森 光本部長と田中氏による対談が行われ、「歩く」楽しさを広げていくことが、ツーリズムの質の向上に繋がっていくとの観点から議論が深められました。

また、本セミナーは履修証明プログラム（デスティネーションマネージャー育成講座）向けに今年度より開講し

た「アドベンチャーツーリズム実践講習」の最終講義としても位置づけられ、「私たちの考える民間主導によるアドベンチャーツーリズムのあり方」をテーマとした受講者による発表も行われました。

参加者からは「改めて歩くことの大切さを考えさせられた」「アドベンチャーツーリズムは自分には関係ないと思っていたが、参加して良かった」などの感想が聞かれました。

最後に、国際広報メディア・観光学院長の奥 聡教授が閉会の挨拶を行い、本セミナーは盛会のうちに終了しました。

（観光学高等研究センター、国際広報メディア・観光学院）



田中氏による特別講演



対談の様子



履修証明プログラム受講生による発表

低温科学研究所技術部で第30回技術報告会を開催

12月6日（金）、低温科学研究所講堂において、低温科学研究所技術部主催・技術支援本部共催による第30回技術報告会が開催されました。

報告会では、本研究所技術部関わった9件の研究発表や技術報告が行われた他、学外の参加者からも研究発表

が行われました。30名弱の研究者・技術職員・学生などが参加し、活発な意見が交わされ、専門領域を超えた分野の研究や技術に触れる貴重な場となりました。

本報告会の内容は「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第30号」と

してまとめられ、発行しています。また、本研究所技術部ウェブサイトにも掲載していますので、ご覧ください。

<https://www2.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



佐崎 元 技術部長（低温科学研究所教授）の挨拶



報告会の様子

人獣共通感染症国際共同研究所と創成研究機構ワクチン研究開発拠点が国際シンポジウム「第12回人獣共通感染症克服のためのコンソーシアム会議」を開催

12月2日（月）と3日（火）に国際シンポジウム「第12回人獣共通感染症克服のためのコンソーシアム会議」を、人獣共通感染症国際共同研究所（以下、IIZC）と創成研究機構ワクチン研究開発拠点（現：総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点。以下、IVReD）の共催で、獣医学研究院での対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。本シンポジウムは、メルボルン大学、アイルランド国立大学ダブリン校、アブドラ国王科学技術大学、IIZCとIVReDの研究進捗状況を共有し、4大学の共同研究連携をさらに強化することを目的としております。

12月2日（月）は、寶金清博総長による開会の挨拶と喜田 宏ユニバーシティプロフェッサーの歓迎の辞に続き、コンソーシアムの設置10周年記念式典が執り行われました。平成26年に人獣共通感染症克服のためのコンソーシアムが設立されて以来10年間、IIZCとの国際連携研究教育の推進に御協力いただきましたアイルランド国立大学

ダブリン校のウィリアム・ホール名誉教授とスティーブン・ゴードン教授、アブドラ国王科学技術大学のアーナブ・ペイン教授に喜田ユニバーシティプロフェッサーから感謝の意を表する盾が贈呈されました。その後、IIZC所長の高田礼人教授による研究所の概要説明に続き、国際協働ユニット長であり、IVReD拠点長の澤 洋文教授より、国際協働ユニット（GI-CoRE協力拠点）の役割と実施体制、海外連携大学とのコンソーシアム形成の意義と目的について、また、IVReDのワクチンの迅速な開発・生産に向けた研究計画と、国際研究・教育ネットワークを含む学内外の関係機関や企業との協力・連携体制について説明がありました。その後、インフルエンザとCOVID-19に対するワクチンと宿主反応、細菌感染症、ウイルスとプリオン感染症、病原体のゲノム分析の4つのセッションで、2日間にわたり、メルボルン大学のキャサリン・ケジェルスカ教授、エリザベス・ハートランド教授、アイルランド国立大学ダブリン校のゴードン

教授、アブドラ国王科学技術大学のペイン教授、エジンバラ大学のマーク・スティーブンス教授をはじめ8名の海外連携大学の研究者、及びIIZCの中島千絵教授と山岸潤也教授、IVReDの澤教授と獣医学研究院の堀内基広教授をはじめ7名の本学研究者が、人獣共通感染症研究の進捗状況を発表しました。

本シンポジウムでは、IIZC、獣医学研究院、IVReD、One Healthリサーチセンター等の研究者と大学院生、及び海外連携大学の研究者をあわせて2日間で、のべ281名（対面：270名、オンライン：11名）が参加し、活発な質疑応答と議論が交わされ、盛会のうちに終了しました。

なお、国際感染症学院の大学院生には特別授業として公開され、のべ123名の参加があり、世界の第一線で活躍する研究者の先端的研究発表を聞き、基礎研究と社会実装に関する知識を深める有意義な機会となりました。

（人獣共通感染症国際共同研究所、総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点）



寶金総長による開会の挨拶



喜田ユニバーシティプロフェッサー（左から2人目）と10周年記念盾受領者



シンポジウムの様子



集合写真

スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム 「スラブ世界における言語・ネイション・標準化：その類似と相違」を開催

12月18日（水）、19日（木）に、スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム「スラブ世界における言語・ネイション・標準化：その類似と相違」を開催しました。

本シンポジウムは、本センターが近年推進する「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」（長縄宣博代表）、「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット」（青島陽子代表）の活動の一環として、カンザス大学教養学部スラブ・ドイツ・ユーラシア研究学科（アメリカ）、ザグレブ大学哲学部言語学科（クロアチア）との国際的な協同組織で実現されました。東西ヨーロッパ、北米、日本の合計12か国から、世界的に著名なシニア研究者に加え、活躍する中堅・若手研究者が札幌に集結しました。このシンポジウムの目的は言語標準化、民族アイデンティティ、国家性の複雑な相互関係、ときに政治的衝突や戦争すら生じるケースを、事

例が豊富なスラブ語世界を題材とし、学際的に論じることでした。

言語標準化、民族アイデンティティ、国家性の問題は、とりわけヨーロッパの諸帝国が崩壊に向かい、国民国家の形成に向かう19世紀と関連付けられて論じられますが、実際にはより根が深く、個々の事例もこのように単純化されるのは誤解の危険をはらんでいます。したがって、本シンポジウムでは、スラブ世界の言語標準化の理論、類型とその歴史、言語とナショナリズムの相関、スラブ諸語に見られる多極性とそれに相対するイデオロギー、複数言語使用のスラブ諸国家の動態、言語的帝国主義、国家を持たない少数民族話者言語の標準化、多極性言語の自然発生と人工的な作用など、多様なアプローチと論点を準備しました。そして、現在起きているロシアによるウクライナ侵攻に関連する、ウクライナ語やウクライナにおけるロシア語、並びに戦

時下の民族アイデンティティを巡る問題も含めて、スラブ語世界全体を広く、通時的、共時的に論じることを目指しました。

閉会の際に、カンザス大学のマーク・グリーンバーグ氏は、「このような学術的にハイレベルなシンポジウムが、高い組織力をもって実現できる研究機関は世界でも珍しい。スラブ・ユーラシア研究センターは、スラブ言語学だけではなく、学際的なスラブ研究の実践においても、世界に誇る研究機関である」と結論付けました。なお、本研究の成果は、アムステルダム大学出版会から、グリーンバーグ氏、ザグレブ大学のマテ・カポビッチ氏、本センターの野町素己氏の編集で、近い将来刊行される予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



シンポジウム参加者と関係者



司会の松本彩花氏（奥）と
質問に回答するピリャナ・コナタル氏（手前）

北方生物圏フィールド科学センター研究林からサイエンスフェスタに初出展

北海道大学主催のサイエンスフェスタ2024（12月14日（土）～12月15日（日）開催）において、北方生物圏フィールド科学センター研究林が初出展しました（研究林の出展は12月14日（土）のみ）。

今回のイベントでは主に北管理部及び雨龍研究林のスタッフが準備と当日の対応をし、「北海道大学研究林ってどんなところ？研究林の森を体感しよう！」をテーマに「箱の中身はなんだろう？～北海道大学研究林が箱の中に？！～」「もったいない苗木や木材を使ってクリスマスツリーやリースを作ろう！」の2つのイベントを実施しま

した。

箱の中身当てクイズでは、段ボールに入れた毛皮や植物を恐る恐る触りながら親子で盛り上がる光景が多く見られました。

クリスマスツリーやリース作りの体験では38組の方に参加いただき、ブースは満員の状態も多く、混雑時には残念ながら参加できずに帰られる方もいらっしゃるほどの盛況ぶりでした。お子さんの参加者も多く、思い思いのオリジナル作品を作成し、自分の作品と一緒に記念撮影をする参加者も多数見受けられました。

また、当日は北管理部と雨龍研究林

の職員が製作した木工品の展示販売も行いました。30名以上の方にご購入いただき、材料の樹種に関する質問もいただくなど、大変興味をもっていただけた展示となりました。この他、各種ポスター展示も行い、研究林の活動をアピールするよい機会になったのではないかと思います。

これからも北管理部及び雨龍研究林では、研究林の魅力や重要性を発信する窓口としての役割を担っていきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）



箱の中身当てクイズの様子



ツリー作り体験の様子



参加者が作成したツリー



木工品販売の様子

広域複合災害研究センターが令和6年度防災シンポジウム 「北海道における広域複合災害と減災方策」を開催

広域複合災害研究センターは、防災に関する全学的な組織として教育研究や人材育成を進めてきました。この度、本センター主催、国土交通省北海道開発局、北海道、北海道立総合研究機構後援のもと、令和6年度防災シンポジウム「北海道における広域複合災害と減災方策」を、12月11日（水）に学術交流会館で開催しました。

本シンポジウムでは、本センターの第一期活動報告書「広域複合災害減災の手引き」の解説を通じて、地震発生による津波浸水・被害想定を考え方、広域複合災害の実態や特徴、及びその減災方策について話題提供を行いました。また、道内市町村の防災担当者を対象として、YouTube同時配信を併用したハイブリッド形式で開催し、当日は、道内市町村防災担当者のほか、国や道などの行政機関、民間コンサル

タントの防災に関わる技術者や大学関係者など、オンライン視聴者と合わせておよそ100人が参加しました。

シンポジウムでは、まず、瀬戸口剛理事・副学長が開会挨拶を行いました。続いて、谷岡勇市郎理学研究院特任教授が「北海道で発生が想定される地震津波災害」と題し、基調講演を行いました。その後、山田 孝農学研究院特任教授が「広域複合災害とは」、厚井高志広域複合災害研究センター特任准教授が「近年の広域複合災害の実態と特徴」、山口真司政策研究大学院大学教授が「広域複合災害の減災への基本的考え方」、岡田成幸名誉教授が「広域複合災害対策の方向性の提案」と題した講演を行いました。最後に質疑応答の時間を設け、参加登録時に受け付けた津波避難対策における自助や共助の提案、令和6年能登半島地震後

の災害関連死、災害対応力低下に対する科学技術の展望、北海道における事前復興の可能性、今後の広域複合災害の危険性の一般への周知手法に関する質問に対し登壇者が回答する形で、議論を発展的に行いました。

開会挨拶では、佐々木貴信センター長から、本センターでは2024年度より文部科学省プロジェクト研究が開始され、寄附金とのハイブリッドで運営されていることや、社会連携やリカレント教育を強化し、新たな学問分野「広域複合災害減災学」の創出に向けて活動を本格的に開始したことが述べられました。本センターでは次年度以降も毎年防災シンポジウムを開催していきます。

（広域複合災害研究センター）



開会挨拶をする瀬戸口理事・副学長



参加者からの質問に応える登壇者たち

「レバンガ北海道」が北海道大学病院で子どもたちと交流

12月5日（木）に、B.LEAGUE所属のプロバスケットボールチーム「レバンガ北海道」が実施する社会貢献活動の一環として、公式マスコット「レバード」、公式チアダンスチーム「パシスタスピリッツ」のHINATA様、マーケティングディビジョンの宮本真司様（元プロバスケットボール選手、愛称：しんしん）、及びレバンガ北海道のオフィシャルパートナーである株式会社北海電工のマスコット「でんてん」らの訪問チームが来院し、入院中の子どもたちと交流するイベントが開催されました。

イベントでは、訪問チームから子どもたちに向けて、子どもたちの健康と

早期回復を祈る温かいメッセージが送られました。寄贈される絵本『はくとクラウンの冒険』3部作の読み聞かせも行われ、子どもたちは、物語の世界に引き込まれ、冒険の主人公に自らを重ねて楽しく体を動かしました。

続いて、HINATA様によるチアダンスの振付紹介があり、子どもたちは、レバードやでんてんと一緒に、チアダンスを踊りました。初めてのチアダンスに挑戦する子どもたちも多く、会場は大いに盛り上がり、笑顔あふれる素敵なひとときとなりました。さらには、レバンガ北海道から子どもたちに贈るエールとして、しんしんによるシュートパフォーマンスが披露され、

見事、ゴールが決まると、子どもたちから大きな歓声と拍手が送られました。

イベントの最後には、記念品の絵本が本院に贈呈されるとともに、HINATA様、マスコットたちとの記念撮影が行われ、盛況のうちに閉会となりました。

今回のイベントは、子どもたちにとって、かけがえのない楽しい経験になったとともに、寄贈された絵本は、小児科病棟に配架され、入院中の子どもたちをいつでも勇気づける素敵なプレゼントとなります。

（北海道大学病院）



絵本の読み聞かせの様子



チアダンスの様子

北海道大学病院で「第64回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催

北海道大学病院では、12月19日（木）に「第64回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催しました。例年、病院の多職種から成る「作業部会」が中心となって様々な企画を行っており、今年も、会場のアメニティホールには、電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーや空気で膨らませたエアサンタが飾られ、見慣れた風景が華やかに彩られました。

渥美達也病院長の挨拶で開会し、続

いて、本学の学生サークル「アンサンブル・フラテ」によるクリスマスソングの演奏と、本院呼吸器内科の庄司哲明医師と児島裕一医師によるオペラ歌唱が披露されました。定番のクリスマスソングの演奏や大迫力のオペラ歌唱に会場全体が大いに盛り上がりました。

演奏の合間には、バリエーション豊かな品々を景品としたお楽しみ抽選会が行われ、多くの患者さんたちに笑顔の輪が広がりました。

コンサートの最後には、岡林靖子看護部長から、出演者、作業部会及び協賛各社等に対するお礼が述べられ、盛況のうちに幕を閉じました。

病院職員による手作りのクリスマスコンサートは、訪れた人々の心に温かな思い出を残したことでしょう。

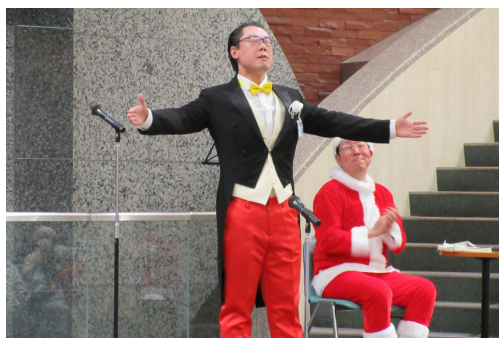
（北海道大学病院）



開会の挨拶をする渥美病院長



アンサンブル・フラテによる演奏



庄司医師と児島医師によるオペラ



岡林看護部長による閉会の挨拶

博士学位記授与

12月25日（水）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士21名、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士1名に学位を授与しました。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（法学）	リ シュクム 李 淑夢	日中成年後見制度における身上保護に関する比較研究 主査：教授 齋藤 由起
博士（環境科学）	おおにし はるか 大西 晴夏	A conceptual model for a vortex-pair-driven western boundary current extension jet: background flow effects on the extension jet and implementation into the real environment （渦対強制による西岸境界流続流ジェット概念モデル：続流ジェットに対する背景流の効果と現実環境への適用） 主査：教授 谷本 陽一
	いとう けいぞう 伊藤 慶造	音響手法を用いたアマモ場による生態系サービスの定量的評価に関する研究 主査：教授 宮下 和士
	ロマーエヴァ LOMAEVA マリナ Marina	The roles of subnational and non-state actors in environmental governance : Japan, Russia, and the northern fur seal conservation and management in the North Pacific （環境ガバナンスにおける地方公共団体および非国家主体の役割—日本、ロシア、および北太平洋におけるキタオットセイ保護管理を事例として—） 主査：教授 宮下 和士
	ゼン ルイケ 曾 瑞琪	Relationships between functional traits and tree establishment after landslide disturbances in cool-temperate forests （冷温帯林における山腹崩壊後の樹木定着と機能形質との関係） 主査：准教授 小林 真
	ボム ウイシット PHOMVISITH ウアン Ouanh	Effects of Maternal Undernutrition on DNA Methylation, Gene Expression, and Metabolites of Fetal Thymus and Growth in Wagyu (Japanese Black) Cattle （和牛（黒毛和牛）における母牛の低栄養が胎仔胸腺のDNAメチル化、遺伝子発現、代謝産物および成長に及ぼす影響に関する研究） 主査：教授 後藤 貴文
博士（理学）	にしだ たつき 西田 竜葵	On representatives of hyperfunctions with several growth orders via relative Čech-Dolbeault cohomology （相対チェックドルボーコホモロジーによる佐藤超関数の種々の増大度を持つ代表元について） 主査：教授 本多 尚文
	ショウ シリョウ 周 子凌	Study on Factors Affecting the Quality of Life Based on a Closed Air-flow System （クローズドエアフローシステムに基づく生活の質に作用する要因に関する研究） 主査：准教授 三品 具文
	みむら ゆうた 見村 優太	Generative AI Exploration of MSSM-Like Models in $E_8 \times E_8$ Heterotic String Z_6 -II Orbifold Compactifications （ Z_6 -II オービフォールドコンパクト化における $E_8 \times E_8$ ヘテロティック弦理論でのMSSM様モデルの生成AIによる探索に関する研究） 主査：教授 小林 達夫
博士（農学）	いの はるか 飯野 遥香	北海道米の品質食味の向上および利用拡大に関する研究 主査：教授 小関 成樹
博士（ソフトマター科学）	シ ヤリ 石 雅麗	Chiroptical Activity of Nanorod-DNA Polyion-Complexes （ナノロッド-DNA ポリイオン複合体のカイロプティック活性） 主査：教授 居城 邦治

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（教育学）	ホイットフィールド WHITFIELD デール リー Dale Lee	A Historical Study of Education and <i>Shūkyū</i> in Japan （日本における教育と蹴球に関する歴史的研究） 主査：教授 池田 恵子
博士（保健科学）	さいとう りゅうじ 齋藤 隆司	心拍変動バイオフィードバック訓練が不安低減効果と脳活動に与える影響：脳波（EEG）と内受容感覚の観点から 主査：教授 横澤 宏一
博士（工学）	きつかわ ゆうへい 吉川 優平	治療期間中の体内構造変化に対する適応陽子線治療に関する研究 主査：准教授 宮本 直樹
博士（理学）	チュン ジアカイ 陈 佳凯	Synthesis and Surface Modification of Formamidinium Tin Iodide Perovskite Crystals （ホルムアミジニウムヨウ化錫ペロブスカイト結晶の合成と表面修飾） 主査：教授 松井 雅樹
博士（工学）	すず き りょうた 鈴木 涼太	Molecular Design of Functional Polyesters via Ring-opening Alternating Copolymerization using Simple Organocatalysts （シンプルな有機触媒を用いた開環交互共重合による機能性ポリエステル分子の分子デザイン） 主査：教授 松本 謙一郎
博士（経済学）	モンチュエボラタン MONTCHEBOLATAN ニコル チャビ NICOLE CHABI	Diversity of Industrialization in Africa: Transformation of Employment and Emergence of Telecommunication (1960-2021) （アフリカにおける工業化の多様性：雇用の変革と通信の出現(1960-2021年)） 主査：教授 松村 史穂
博士（経営学）	やました しゅうへい 山下 修平	戦時期日本の経理統制下における会計実務の展開—王子製紙とその周辺企業における、減価償却・勘定科目の標準化を事例に— 主査：教授 春日部 光紀
博士（医学）	くどう ゆうき 工藤 友喜	難治性自己免疫疾患ならびにもやもや病の病態解明と新規バイオマーカーの探索 主査：教授 村上 正晃
	たけうち ゆうた 武内 優太	CEA特異的キメラ抗原受容体発現T細胞を用いた膵臓癌に対する免疫細胞療法に関する研究 主査：教授 坂本 直哉
	ヌーイエンタン NGUYEN Tan ダット Dat	Studies on the Role of Self-esteem and Self-compassion in Suicide Prevention （自殺予防における自尊感情とセルフコンパッションの役割に関する研究） 主査：教授 玉腰 暁子

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（環境科学）	たかはし やすお 高橋 康夫	The contribution of rural natural capital to quality of life of urban-to-rural migrants: combined empirical evidence from national- and municipality-scale studies in Japan using social surveys and geospatial analyses （地域の自然資本による、地方移住者の生活の質向上効果：日本全国および市町村規模の社会調査と地理空間情報解析を用いた統合的実証研究） 主査：教授 渡邊 悌二

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
6.12.13	ボゴール農業大学（インドネシア共和国） Erika Budiarti Laconi サイエンス&テクノロジーパーク所長	今後の交流に関する懇談
6.12.17	中華人民共和国国家衛生健康委員会 雷 海潮 主任	今後の交流に関する懇談
6.12.18	駐日大韓民国大使館 朴 喆熙 特命全權大使	今後の交流に関する懇談及び講演会



Erika Budiarti Laconi ボゴール農業大学
サイエンス&テクノロジーパーク所長（左から4人目）



雷 海潮 中華人民共和国国家衛生健康委員会主任
（前列中央左）



朴 喆熙 駐日大韓民国大使（右から3人目）

（国際部国際連携課）

■人事

令和6年12月15日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【部局長・施設長等】 大学院法学研究科長 法学部長 （期間：令和8年3月31日まで）	佐々木 雅 寿	大学院法学研究科教授
【副研究科長】 大学院法学研究科副研究科長 （期間：令和8年3月31日まで）	曾 野 裕 夫	大学院法学研究科教授
【教育研究評議会評議員】 （期間：令和8年3月31日まで）	曾 野 裕 夫	大学院法学研究科教授

令和7年1月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【副理事】 副理事 （期間：令和8年3月31日まで）	石 塚 真由美	大学院獣医学研究院教授
【部局長・施設長等】 総合イノベーション創発機構長 （期間：令和8年3月31日まで） 総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点長 （期間：令和8年3月31日まで） 総合イノベーション創発機構データ駆動型融合研究創発拠点長 （期間：令和8年3月31日まで） 総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点長 （期間：令和8年3月31日まで）	瀬戸口 剛 前 田 理 長谷山 美 紀 澤 洋 文	理事（副学長） 総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点・大学院理学研究院教授 大学院情報科学研究院教授 総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点教授
【教授】 大学院理学研究院教授 大学院理学研究院教授 大学院医学研究院教授 総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点教授 総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点教授	小 林 政 晴 速 水 賢 安 部 崇 重 美 多 剛 澤 洋 文	大学院理学研究院准教授 大学院理学研究院准教授 大学院医学研究院准教授 創成研究機構化学反応創成研究拠点教授 創成研究機構ワクチン研究開発拠点教授

新任副理事紹介

令和7年1月1日付



副理事に

いしづか まゆみ
石塚 真由美 氏

副理事に石塚真由美氏が発令されました。
任期は、令和8年3月31日までです。

略 歴

生 年 月 日 昭和44年12月10日
 平成 6年 3月 北海道大学獣医学部卒業
 平成10年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科博士課程修了
 平成10年 3月 獣医学博士（北海道大学）
 平成10年 4月 } 北海道大学大学院獣医学研究科研究生
 平成10年10月 }
 平成10年11月 } 日本学術振興会特別研究員
 平成11年 1月 }
 平成11年 2月 } 任期付研究員（国立環境研究所環境健康部保健指標研究室）
 平成12年 9月 }
 平成12年10月 北海道大学獣医学部助手
 平成16年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科助教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科准教授
 平成22年 6月 北海道大学大学院獣医学研究科教授
 平成25年 4月 } 北海道大学大学院獣医学研究科副研究科長
 平成29年 3月 }
 平成29年 4月 北海道大学大学院獣医学研究院教授
 平成31年 4月 } 総長補佐
 令和 6年12月 }
 令和 3年 4月 } 北海道大学大学院獣医学院長
 令和 7年 3月 }

新任部局長等紹介

令和6年12月15日付

法学研究科長・法学部長に



さ さ き まさとし
佐々木 雅寿 教授

令和6年12月14日限りで尾崎一郎法学研究科長・法学部長が任期満了となり、その後任として佐々木雅寿教授が発令されました。

任期は、令和8年3月31日までです。

略 歴

昭和61年 3月	北海道大学法学部卒業
平成 1年 3月	北海道大学大学院法学研究科博士後期課程中途退学
平成 7年 3月	博士（法学）（北海道大学）
平成 1年 4月	北海道大学法学部助手
平成 2年 4月	大阪市立大学法学部助手
平成 3年 4月	大阪市立大学法学部助教授
平成13年10月	大阪市立大学法学部教授
平成19年10月	北海道大学大学院法学研究科教授
平成30年 4月	北海道大学大学院法学研究科副研究科長
令和 2年 3月	
平成30年 4月	北海道大学法科大学院長
令和 2年 3月	
令和 4年12月	北海道大学教育研究評議会評議員
令和 6年12月	
令和 4年12月	北海道大学大学院法学研究科副研究科長
令和 6年12月	

新任教授紹介

令和7年1月1日付



理学研究院教授に

こばやし まさはる
小林 政晴 氏

数学部門数学分野

最終学歴

東京理科大学大学院理学研究科博士後期課程修了（平成19年3月）
博士（理学）（東京理科大学）

専門分野

調和解析



理学研究院教授に

はやみ さとむ
速水 賢 氏

物理学部門電子物性物理学分野

生年月日

昭和62年6月10日

最終学歴

東京大学大学院工学系研究科博士後期課程早期修了（平成26年9月）
博士（工学）（東京大学）

専門分野

物性理論



医学研究院教授に

あべ たかしげ
安部 崇重 氏

生年月日

昭和46年3月14日

最終学歴

北海道大学大学院医学研究科博士課程修了（平成17年3月）
博士（医学）（北海道大学）

専門分野

泌尿器科、泌尿器腫瘍学

訃報

名誉教授 よこやま いずみ
横山 泉 氏
(享年101歳)



名誉教授 横山 泉 先生は令和6年10月24日にご逝去されました。

横山先生は大正13年1月1日に長野県に生まれ、東京大学理学部地球物理学科に進学し、同大学にて理学博士号を取得されました。東京大学地震研究所を経て、昭和32年に北海道大学助教授、同38年に同教授に就任されました。その傍ら、日本火山学会委員長（現会長）、国際火山学及び地球内部

化学協会副会長を歴任されました。昭和62年に定年退職され、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。退職後はメキシコ国立自治大学の客員教授に招かれ、また日本学士院会員にも選出されました。

東京大学在籍中は、日本列島における地球磁場に特有の偏りがあることを発見し、地磁気を用いた地殻構造探査に貢献する重要な研究成果を挙げられています。また、伊豆大島火山での長期にわたる観測から地磁気の経年変化を明らかにしました。この経年変化はマグマに伴う熱的活動に起因することを突き止め、後の地磁気を用いた火山研究の礎となっています。北海道大学移籍後は、当時ほとんど行われていなかった火山の重力測定に取り組まれ、特にカルデラの重力分布を明らかにしてこられました。その結果をもとに、従来から地質学的に認知されていたカルデラ成因論に異を唱え世界的に注目

されました。このカルデラ成因論については未だ決着を見ておりませんが、先生は晩年に至るまで研究を継続し、その精力的な取り組みは高く評価されています。一方で、北海道大学有珠火山観測所の設立（昭和52年）に尽力され、初代所長に就任されました。設立と同年に開始した有珠山の噴火では火山観測の陣頭指揮をとるとともに、北海道内の各火山の観測体制強化に努めました。

また、本学在任中は多くの卒業生を輩出しました。謙虚に自然現象に向き合い、取得した観測データを精査することによって新たな事実を見つけ出すという研究姿勢は世代を超えて浸透し継承されています。先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(理学院・理学研究院・理学部)

名誉教授 すぎやま けんいちろう
杉山 憲一郎 氏
(享年78歳)



名誉教授 杉山 憲一郎 先生は、令和6年11月7日にご逝去されました。

杉山先生は、昭和22年5月に北海道栗沢町（現在の岩見沢市）に生まれ、同43年に旭川工業高等専門学校を卒業後、山梨大学工学部機械工学科に編入、同45年に同大学を卒業されました。その後は、北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程に入学、

修了後の昭和47年4月に北海道大学工学部助手に着任されました。昭和59年6月に工学博士（北海道大学）を取得され、平成2年4月に助教授、同13年4月に教授に昇任されました。この間、平成元年4月には、昭和63年度日本機械学会賞論文賞を受賞されました。平成23年に定年退職され、在職中の本学及び社会に対する大きな貢献によって、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

教育面では、原子力安全工学特論などの多くの原子力分野の講義を通じて、後進の指導にあたられ、多数の優秀な人材を育成されました。研究面では、金属ナトリウムによる炉心冷却時の熱流動に関する実験及び解析を進め、ナトリウム冷却型高速増殖炉の炉心安全性評価の信頼性向上に大きく貢献されました。一方、学外においては、内閣府原子力安全委員会原子炉安

全専門審査会委員、経済産業省資源エネルギー調査会委員などの要職を歴任され、我が国の原子力分野における安全性向上に大きく尽力されました。また、初等中等教育におけるエネルギー教育の重要性を早くから認識され、北海道エネルギー環境教育研究委員会及び北海道大学エネルギー教育研究会を設立されるとともに、日本エネルギー環境教育学会においては、創設発起人の一人として、また創設後は副会長としてその活動にも尽力されました。

杉山先生の周りは常にエネルギーと人に満ちており、これからも杉山先生を中心に多くの活動が展開されるものと信じていた中のご逝去でした。杉山先生の長年にわたるご功績に感謝いたしますとともに、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

編集メモ

- 大学入学共通テストが1月18日（土）、19日（日）の2日間にわたって実施されました。
当日の試験会場は、設問へ集中する受験生たちの気迫が、空気を伝ってピリピリと肌を刺すようでした。
今回も大きなトラブルは発生せず、無事に終了しました。業務に当たられた教職員の皆様、お疲れ様でした。



入場する受験生たち

- 12月18日（水）より公開中の本学公式クラウドファンディング、プロジェクト第9弾。公開期間は2月14日（金）までです！皆様からのご支援、お待ちしております。
詳細は、QRコードからご覧ください！

北海道大学クラウドファンディング
<https://readyfor.jp/pp/hokudai>



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は低温科学研究所です。
1941年に設置された本学で最も歴史のある附置研究所で、雪氷学を始め、低温や寒冷圏に関する自然現象をテーマにした、特色ある研究が行われています。
研究所名のせいかもしれませんが、雪の中に佇む姿が絵になります。

キャンパス風景 58 低温科学研究所（北19条西8丁目）



北大時報 ① No.850 令和7年1月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>